規格外の行く道（仮）

楽隠居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
規格外の行く道（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９４９０Ｚ

【作者名】
楽隠居

【あらすじ】
最初東方に行ってからだいたいのところで別世界に行きますが、しばらく東方になると思います。間違い、指摘、気になる点がありましたら感想の方に書き込みお願いします。

プロローグ（前書き）

自分の勢いで書いてしまったので駄文だと思います。
こういう小説が苦手な方は閉じるボタンでウインドウを閉じていただいても構いません。

プロローグ

ここは何もない空間、そこに一人のジジイが座っていた。

「さて、こいつはいつになったら起きるのかのう」

俺はその言葉に気がつき、体をひねった。

「お、こいつようやく目覚めるのか」

「あ、あと五分」

ふう、全く、人の眠りを妨げやがって。

「いつまでもグースカ寝るんじゃない！はやく起きろアホ！」

野太い怒鳴り声と腹部への衝撃を感じ、俺は目を開けた。

「痛ててて、休日の朝くらい長く寝かせてくれても……ココ、ドコ？」

目を開けると見知らぬ光景、周り一面真っ白の空間だった。

「ここは、そうじゃのう。神界の一部と思っとくれ」

俺の目の前のジジイは変な妄言を吐いた。つーかこのジジイ誰だ？

「妄言などではない！本当のことじゃ！それにワシ神様じゃし。」

は…？神様？おいおいいい加減にしてくれよ。全く、頭がボケたか。

「頭はボケてないわい！今のお前の体を見てもそんなことが言えるか？」

体？別におかしいとことか……ん？

「えぇぇぇぇ！体がねぇ！は？なぜに？Ｗｈｙ！！」

え？マジ体無いんだけど。やべぇよこの状況。

「ふぅ、ようやく自分の状況が理解できたかの？」

「どうなってんだこれ」

いや、マジヤバイ、本当にヤバイ。

「ふっふっふ。教えて欲しいかの？」

くそっ、なんか笑い方がむかつく。まあまず話を聞いてみるか。

「ああ。で、どうして俺はこんな姿なんだ？」

「ふむ。では教えてやろう。お前は死んだのじゃ。」

やっぱり俺は死んだのか。

「で、それから？」

「ん？なんかもっとこうリアクションはないのかのう？「えぇぇぇ

！まじで！」とか「嘘だろ。そんなの。」とか」

「いや、だいたい分かるだろう体がない時点で」

「いや、まあそうじゃが、でもリアクションくらい欲しい「で、それで？」……は？」

「いや、死んだのは分かったとして、もっとなんか有るだろ。死因とか、なぜここにいるとか。」

「話は最後まで聞いて欲しいのう。…で、死因じゃったか、それはまあ、こう自然の摂理から外れたような感J「早く言え」わしが殺したのじゃ」

「まあ、そのくらいは予想できる」

「なら聞かんでよかったじゃろう」

「はっはっは。どういう答えが返ってくるかと、つい。」

「はぁ、もう疲れたわい。では話すとしようまず理由からじゃが、おまえ、アニメとか漫画が大好きじゃな？」

「ああ。」

「ワシ、神様の中でも最高神より上の創造神の地位での、暇だったんじゃ。」

「これまたなぜ？」

「うむ。ワシとても偉いじゃろ。それでのう、みんながワシの負担を減らそうとしてのう。最終的に仕事が回って来なくなったのじゃ。」

「いや、自分でもらいに行けばいいじゃん。」

「何回かそうしたわい。でも皆が「私たちがしますので創造神様は休んでください」と言ってくるのじゃ」

「まぁそれは取りづらいな」

「そうじゃろう。それで暇になったワシは自分で仕事を作ることにしたのじゃ」

そうなるとその仕事っていうのはやっぱり。

「それが俺、と」

「そうじゃ。最近おまえのいた世界では転生モノとかそのへんが流行っておるじゃろ。」

「まぁそうだが……ソユコト？」

俺に転生しろと

「うむ。お前の考えとる通りのことじゃ。嬉しいか、嬉しいじゃろう？」

「ああ、嬉しい。だが一つ聞かせてくれ。あんたはなぜ俺を選んだ

？」

「ああ、そのことかのう。それはな、おまえの想像力が豊かで面白くなりそうだったからじゃ。」

「そうか。分かった。で、どこに転生させてくれるんだ？」

「ふっふっふっふ。それはのう。おまえの好きな東方の世界へ行かせてやる。」

このジジイ流石神様だ。

「マジか！やったぜ！で、で？俺はなんかもらえるのか？」

「うむ。いくつか特典をやる。それくらい自分で考えてもらっても構わんぞ。」

こいつ、転生の話辺りからテンションとかがガラッとかわったのう。

「少し規格外になってもいいか？」

「うむ。構わん。ワシ、創造神じゃから大体のことは出来るからのう。ただし、あまり強すぎるものは少し制限を掛けさせてもらうぞ。転生してすぐに暴走とかになったら話にならんしの。」

「ああそれで構わない。」

「マジで暴走とかそんなことになったらこちらも暇つぶしにならんからのう。案外人間を眺めるのも楽しいから期待しとるぞ。」

「分かっているつもりだ。」

…考え中……考え中……考え中……考え中……終わり……

「この４つでいいのかのう？」

「ああ。」

「でも、この４つじゃ心配じゃからサポートとかワシと通信できる端末とかもオプションでつけとくからのう。」

このじいさん結構いい奴だな。

「サンキュー。で、これからもう出発か？」

「いや、まだじゃ。おまえには体とか名前がないじゃろう。それを今から決めるからのう。」

「そういえば体がなかったな、それに名前もおまえとしか呼ばれてないな。」

「じゃからそこらへんの情報を決めるために、この人形に入ってもらうぞ。」

「このマネキンみたいな人形に？どうやって？」

「はいろうと思えば入れるはずじゃ。まあ試しにやってみい。」

いやいや、そんな曖昧な説明をされても。

「こうか？いやこうか？くそっ、わからん。」

「入れんか？まあ長い間使ってなかったからのう。仕方ないから強引に入れてみるぞ。」

「マジでかって」グッグッグッグッグ

「痛い痛い痛い痛い痛ぁーい！」ゴリュ！

「（嫌な音がしたのう：（；゛゜'ω゜'）：）だ、大丈夫かのう？」

「な、なんとか……」

「（ふう。良かったわい）じゃ、じゃあこの端末に名前を記入してくれ。その他の情報はワシが書き込むからのう。」

「イテテ…ん？これでいいか？」カタカタカタカタッ　カタンッ

「ふむ。まあいいじゃろう。その他は後で設定紹介で紹介するからのう。しかし、名前が『神羅』、これでいいかのう？」

「いいだろ、別に」

「まあ基本的なことはワシがしておいたからいいとして。おまえは

どの辺に行きたいのじゃ？」

「どの辺って言うと？」

「時代じゃよ時代。どのくらいに飛ばすか言ってくれ」

そうだな……。能力の確認もしたいから……。

「結構前の人がいない辺りで頼む」

「分かった、でｈ「ちょっと待て。」なんじゃ？」

「俺はお前をなんて呼べばいい？お前の名前をまだ聞いてないんだが。」

「ふむ。そう言われてものう。名前などないからのう。お前の好きに呼ぶといい。」

「俺の好きに……か。」

こいつあれだろう、神様だろ？で、俺を転生させるんだろう？ん？転生？つまりは俺を新しく生み出すってことだろ？ってことはこいつは俺の産みの親？で、こいつジジイだろう？だったら呼び方は一つしかないな。よし！

「決まったかのう？」

「ああ。よろしくな、『親父』！」

「お、親父じゃと！なぜそうなった。」

「え？そりゃああんたは俺を転生させる、つまり、世界に新しく生み出すじゃないか。だからこそあんた
は俺の親だ。という訳でよろしくな親父！」

「う～む。まあ好きに呼べといったのはワシじゃからなぁ。まあいいじゃろう。」

「それじゃあ親父、転生よろしく。」

「うむ。それでは行くぞ。」

「ああ。」

さーて、地面に穴か？それとも扉か？どういうふうにするんだ？

「ではっ！セイッッッ！！！」ゴインッ！！！

「ウガアァァ！」

な、なんという力技。親父、そりゃないよ。ガクッ……。

「ふむ。それにしても親父とは、面白い奴じゃったのう。まあ、こいつがどうこれからを歩むか、見守るしかないのう。」

プロローグ（後書き）

何処か誤字脱字があったら教えください。
これから受験シーズンですので更新は受験が終わってからになると思います。

設定（転生完了時）（前書き）

主人公設定載せます

設定（転生完了時）

名前：創理（つくり）　神羅（しんら）

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

属性：中立・中庸　特性：矛盾・混沌

能力値（平常時）ｆａｔｅ風

筋力：Ｃ－　魔力：Ｃ＋（気含む）

耐久：Ｄ　幸運：Ｄ＋

敏捷：Ｂ　宝具：ｎｏｔｈｉｎｇ

神様から貰った力

1．「幻想と現実を司る程度の能力」

2．武器

上の１の能力に沿った内容のアイテム。

鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」

どちらもそれぞれの能力に沿っているので、

能力の端末としても使える。

3．改変・改造能力

何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や

特性を変えることが出来る。

4．世界樹の苗木

その名のとおり、世界樹の苗木、

5．神様からのオプション

身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等

便利なものをいただいた。

名前：親父（おやじ）

職業：神　神格：「創造神」

容姿：白く長い髭の老人

悩み：仕事がない、

欲しいもの：仕事

最近まで暇だったので、主人公のサポートをするときに

不意打ちをかけたりする。それほどまでに退屈な生活をしていた。

暇なときは人間の生活を眺める等暇つぶしをしていた。

転生完了！（前書き）

今回も思いついたものを書きました。

転生完了！

頭が痛い……。

まさか転生の方法があんなだとは思わなかったぜ。

「くっそ～、親父め、今度会ったら一発殴ろう。絶対に。」

ピロリロリ♪

俺がそんな感じの決意をしている時、ズボンのポケット辺りから音が鳴った。

そういや俺の格好を伝えておこうと思う。一言で言うとジャージだ。

今の俺の格好は装飾のないただのジャージだ。そんなことはいいとして、俺はポケットの中から板のようなものを取り出す。

「なんか、スマホみたいだな。」

『おおっ！つながったつながった。ふぃー、良かったわい。さて、つながったということは、おまえ、そこにおるじゃろう。』

親父だ。俺をぶん殴った親父だ。

「ああ。いるよ。」

『ふむ。無事に転生できたようじゃの。』

「転生する際に頭殴るってどういうことだよありゃ。」

『いやー。スマンのう、毎度お馴染み！みたいな奴じゃつまらんくなるじゃろう。少しは別パターンでやってみんといかんじゃろ。そっちの方がワシ楽しいし。』

「ずいぶんと自分勝手だな、オイ」

このジジイやっぱアホだ

『ゴホンッ！では今の状況について教えようかのう。今の時代は人が最初に月に行く前……ではなく。そのヒトが人になる前位じゃ。』

マジか。それなら能力の確認をしやすいじゃないか。

『次に能力のことじゃ、おまえの能力に少し制限をする。最初の出力はせいぜい１０％位じゃのう』

「マジか、でもなぜ１０％位なんだ？」

『おまえの能力はコントロールが完全になるまで数千年はかかるじゃろう。それにおまえの魂、存在自体に刻ませてもらったからのう、馴染むまでに時間がかかると思うぞ。』

「そうk『それに』ん？」

『今のおまえには能力の出力的に１，２％位しか操れん、あまり大きなことをすると暴走するかもしれんからのう。まあ、頑張るしか

ないのう。』

「仕方がない。ま、どんなことができるか確かめるしかないか。」

『あ、それとお前は能力がまだコントロール出来てないから練習のために数百年不老にする腕輪か何かを送るからのう。』　ピッ

「切れた……」

さて、アイテムを送るって言ってたがどこから来るんだ？

ヒュゥゥ〜〜〜〜ン

空から何かが落ちてくる音！上か！

俺は顔を上げる。すると空から袋が落ちてきた。ふむ。あれか。

しかし俺が袋を掴もうとしたとき、下から何かが俺の顎に高速でぶつかった。

「ガフッ…くそ…お…やじ……。」

箱のようなものが当たったようだ。しかしそこで俺の意識は途切れた。

ただひとつだけ言わせてもらう。意識が途切れる前にチラッとみえたクソ親父のニヤケ顔のイラストはとてつもなく……ウザかった。

転生完了！（後書き）

もう一話いけるかな？

能力確認

くそう、頭がグラグラする……。

「あのクソ親父め……。」

俺は顎をさすりつつ俺を二度も気絶させたクソ親父の顔を思い浮かべていた。

そういえば何か送るって言ってたな。

「この袋か？」

俺は端末をポケットに入れてから袋の中を探った。

「なんだこれ？」

その中に入っていたものは親父が言っていた腕輪と手紙だった。

まあニヤケ顔のイラストは置いといて

「えーと、なに」

『この手紙を見ているということは目が覚めたようじゃのう（笑）』

親父が気絶させたくせにこの冒頭はムカツク。

『まあ、ワシはここから見ておるから起きたことくらい分かるがのう。』

クソ親父。全部見てるのか。余計にムカツク。

『まあそんなことはさて置き、中身の説明をするぞ。その腕輪おまえの老化を数百年止めるものじゃ。

その間に能力の修行をするといい。その間に人間が知能をもつじゃろう。あと多分能力が馴染むまでに

数千年かかると思うんじゃ。その間はコントロール出来ても３０、４０％までじゃろうな。それと最後

に、忘れておったが「世界樹の苗」だったかのう？あれはお前の近くに鉢に入れておいとるからのう。

あの苗は普通の木の大きさになるのに数千年かかるぞ。まあ育ってくるとその木からマナが発生するか

ら育ち具合が分かるじゃろう。そこまで育つとほかの木と同じ位の速度で育つようになるじゃろう。』

ふむ。まあまあ分かった。つまり俺のすぐそばのこの鉢が世界樹の苗、と。

「よし。今調べても仕方ないからな。とりま、能力確認しますか。」

親父から貰った能力は「幻想と現実を司る程度の能力」、俺が何故

この能力にした理由は応用が利くから
だ。幻想と現実をということは自分の想像つまり幻想を現実に持っ
てくること。簡単にいえば「具現」
や「実現」だ。これが出来るからこそ俺はこの能力を選んだ。解釈
の仕方によるが「だいたいのことが
できる能力」極端にいうと「なんでも出来る能力」なのだ。
しかし、俺はまだコントロールが出来ないのでまずはそこからだ。
「よし。まずどこまで出来るか試さないとな。」
そう言い俺はまず棒を想像する。
「実現」
そうつぶやくと自分の手の中に１ｍくらいの木の棒が現れた。
「ふむ。」
と言って握ると、ポロポロと砕け始めた。
「まだまだか。」
このあと数十年くらいこういう修行が続いた。

早い進化

能力の修行を始めて２００年ほど経った位の頃。俺は違和感を感じていた。少し前にヒトを見たんだが、

土器を作っていたり、竪穴式住居みたいなものを造ったりしていた。

「あまりにも進化が早すぎるだろ」

そう。俺が修行している間にヒトは知能や言語をもち、急激に進化していた。

ピピピッ

ん、この機械音は……。親父。久しぶりだなぁ。

『久しぶりだのう。元気にしておったか。』

「親父、久しぶり。と言いたいが……」

『うむ。おまえの言いたいことは分かっておる。人間の進化の速度じゃろう？』

「ああ。いくらなんでも早すぎるだろう。」

『そのことじゃがのう。何らかのきっかけがあったんじゃろう。１つの発見でも色んな選択肢が生まれ

るからのう。』

「まあある程度したら少し会いに行ってみるか」

『まあ対応としてはそれでいいじゃろう。それにしてもおまえ、少しは能力のコントロールが出来るようになったようじゃのう。』

「ああ。棒とか球みたいな単純なものは完全に具現化出来るようになったぞ。」

『ふむ。おまえも進化が早いのう。出力としては１５～２０％ってとこかのう。』

「ま、そのくらいだろうと思うよ。でも刀とかは失敗しやすいけどな。」

『まだ武器類は難しそうだのう。』

「ああ、そのへんなんだよ。まだ芯の部分がな。」

『ふむ。そのことじゃったら簡単なことじゃ。おまえは今まで普通のもの、見本通りに作ろうと思っとろう。じゃが、それが原因なんじゃよ。』

「普通のものを作ろうするのが悪いのか？」

『いやいや、悪いとは言わん。ただのう、その価値観に縛られすぎとるのじゃおまえは。その能力はお

まえの、おまえだけの能力じゃ。ワシはそうなるようにおまえにそ

の能力を渡した。言ったじゃろう、

おまえの《存在自体》に刻んだ、と。基本は大事じゃが、それじゃあまりにもつまらん。応用するこ

とこそその能力が活きるとこじゃろ？まあ何かのマネをしていたから暴走しなかったのじゃろう。しか

し、少しは別の方向性で作ってみてもいいと思うぞ。改造能力もおまえにやったじゃろう。少しは使っ

てみるんじゃ。自分の幻想をそのまま形にするそう思っていいじゃろう。』

「自分の幻想を形に、ねぇ。」

やってみますか。そう思い想像する。まずは鉄の棒。

鉄の詳しい構成など要らない。ただ単に鉄であれ。脆くない。ただ硬い鉄であれ。

――――――〈実現〉――――――

すると俺の手の中には黒い棒が1本現れた。

『どれ、貸してみろ。……ふむ……ふむ。完全な鉄…じゃな。』

なんじゃろう、鉄は鉄で間違いないのじゃが、この微妙に含まれとる物質が分からん。

まあ気にせずともいいじゃろう。いまは完全に成功したことを喜ぶべきか。

『よくやったのう。他に何か感想はあるかのう？』

「ああ。自分の幻想を形にすることのコツは分かった。だが他の物も出来るかどうかが試したい。」

『いくらでも試すといい。時間はたっぷりあるからのう。』

こいつ、進歩が早いのう。この速度じゃと物体以外もいけるかもしれんのう。

それから俺は同じようなことを繰り返した。

このとき、俺は自分の能力の凄さを改めて感じた。

しかし、この後の俺は集中のしすぎでまた気を失うのであった。

早い進化（後書き）

こんな感じの長さで上げていきます。

情報収集

親父にアドバイスを受けてからこれまた２００～３００年が経った。

最近の人間の進化、発展は凄まじく、１００年前くらいから、移動手段が機械類になったようだ。

ちなみに俺はというと、山奥の洞窟に拠点をつくり４００年くらい暮らしていた。たまに人間の様子を

見に行くが、行くたびに服装や乗り物の形が変わっているのには驚いた。

あれ？俺の時間の感じ方。おかしくないか？

そして最近は人間以外にも人型だったり狼型？の所謂妖怪、らしいものも増えてきた。

いや、昔もいたよ。３００年くらい前も、でもあの時代、まだ妖怪の方が知能が低くてね。

意思疎通がしづらかったんだよ。でも最近言葉を話す奴も出てきたようだし。今度喋りに行った方がい

いか。ずっと能力の修行してたし。

能力の修行、と言えば。俺の能力、大体のことはできるようになってきた、と思う。

あと、ずっと放置してた世界樹の苗木が大体１mより低いくらいになった。そして何か粒子を少し出し始めた。これが〈マナ〉だと思う。

そうそう能力の方だが、武器は大体出来る。が、光学兵器とか複雑なものは思い浮かべづらいから実現しづらい。原型があれば後はどうとでもなる。そういうものだから。この能力。

しかし、妖怪、か。人間も街の外側に何かの柱を建て始めたからなぁ。

仕方ない。一度人間のところで情報を集めるか。そう言いそこらへんの街より一回りも二回りも大きい、まさに“都市”と呼べる場所の近くに

「やって来たわけだが。」

どうするかね。今まではその辺りの近場の街を見て回っていただけなんだが。

こんだけ大きいと警備が厳重だろうな。

今までの街は割りと自然が多く、観光地みたいなところだったのであろうほど外からの客が多く、大体

のことは人ごみに紛れて誤魔化せたんだがなぁ。

今見ている都市は周りを高い壁で囲み、関所があるほどの都市だ。
いかにも重要拠点だとか、偉い人い
ますよ。とか、すべての中心ですよ。みたいね感じで、中心部には
かなり高いビルがある。

「本当、進化しすぎだろ。」

仕方ない。ちょと面倒だが、能力で切り抜けるか。

（想像するのは自分。誰にも見つからない自分。ただの空気と変わらない自分。）

――――――〈実現〉――――――

「ふう。」

これで周りと同化したはずだ。

今回は空気と変わらない自分なので、一応気体になれる。

が、長く気体のままだと戻るのに時間がかかる。だからギリギリ3秒……位が限界だと思う。

さて、潜入開始。

まず、関所のゲートだが、門に走っていき、開くタイミングで気体

へ。

そうすると他人はただの風としか思わない。

抜けたらすぐに実体に戻る。これで中に入ったのだが。この後どうするかねぇ。

……移動中……

という訳で、偉い人がいそうなビルの中にやって来ました。

みんなは全く気づかない。まあそうだろうね。

仕方ない、親父に通信してみるか。

……ピッ♪

「親父ー。久しぶりー。聞こえてるか？」

『おお。聞こえておるぞ。久しぶりじゃのう。そっちからかけるの初めてじゃのう。』

「ああ。聞きたいことがあるんだが。」

『そこの事じゃろう？任せておけ。』

……情報伝達中……

「ありがとな。親父。」

『よいよい。ではのう。』　プツッ

親父から情報を貰った後、それを元に情報を集め、また中心のビルに戻っていた。

「さて、後は大きな情報でもとってきますか」

出会い

それにしても広いな、ここ。

情報収集に来た俺は、都市の中心のビルの中で迷っていた。何故かというと。

「同じような部屋ばっかだな。」

そう。内装が同じような部屋が沢山あるのだ。まるで仮眠室のような部屋が。

ただ仮眠室となると、何らかの研究をしている施設も兼ねているんじゃないかと思う。

機密の情報や研究のデータは外に出したくないだろうからな。

多分だが、ここは研究機関と政治、役所を兼ねている、まさに中枢なんだろう。

少し難しいだろうが、何らかの機密情報が得られそうだ。

「虱潰しで探すしかないか。」

そう思いつつ俺は行動を再開した。

当たり前なんだが、すれ違う人々は俺に気付かない。弱い風を感じる位だろう。

休憩室から、倉庫、トイレ、会議室、ホール、お偉いさんの執務室まで一通りまわってみた。

「ん？この部屋はなんのための部屋だ？」

もう一通り見てまわったころ、俺は誰か個人の部屋の様な所を見つけた。

「ここ…は、誰の部屋だ？」

このビルのなかで一人部屋か？だとするととんでもない人物だな。

「何か資料はないか？」

俺は本棚辺りから調べ始めた俺は、その後、机の一番下の引き出しに入っている封筒を見つけた。

「これは？」

封筒の中の紙に書かれた文字を見ると、

「妖怪対策と月への移住計画について？」

これはどういうことだ？妖怪対策？何故その必要が？

そう。俺はする必要が無いと考えているのだ。

妖怪はまだ弱すぎる。ここまでの技術力を持った人間達ならば、なんの問題もないように感じるからだ。

そもそも妖怪は人の感情から生まれる。恐怖や不安が主だろう。
その程度なら別に脅威にはならないんじゃないか？
と、俺が考えていると、後ろから誰かが部屋に入ってくる音がした。
その人物は入ってきて最初にこう言った。
「あら、そこにいるのは誰？」
声から察するに、女性のようだ。
「ッ……！」
俺に気づいたのか？いや、普通気付かないはずだ。
今の俺は、空気と同じレベルの、有って当たり前、居て当たり前の認識のされ方をするのだから。
そう思っていると、その人物が言った。
「私の部屋で何をしているの？あなた、ここの人間じゃないわね。」
どうやら俺は完全に気づかれていたようだ。仕方ない。
俺は能力を切り、姿を現す。
「あら、見ない顔ね。まあいいわ。それよりここで何をやっていたの？

あなたが手に持っているものを見ればひと目で分かるけど。」
この女性には敵わんか。状況的に見て、警備を呼ばれると面倒だ。
正直に話してみるとしよう。場合によっては交渉できるかもしれないからな。
ただまず、俺の気になる点が一つある。
「お前、どうやって俺に気づいた？」
俺が質問すると、目の前の女性は、そんなの簡単よ。と言って、
「これよ。」
と一言、こっちに何かを見せてきた。手のひらに収まる程度の端末だった。
端末の画面には2つの点が映っていた。ま…まさか。
「なんだこれは？」
俺は一応聞いてみる。すると女性は
「ただの感知器、センサーやレーダーの一種よ。試作品だけどね。」
そう言った。だがそれだけで分かるものなのか？
「なぜそれだけで分かった？」

俺は再度聞く。すると女性は。

「まあね。でもこれは試作品、ちゃんと動作するかわからなかったんだけど。

この部屋に入ったときに反応があったの。生命反応がね。

それに私が「何してるの？」って聞いたとき、あなた動揺したでしょ？

そのときは心拍センサーに反応があったわ。それでもうほとんど確定。でも部屋に入った最初から

分かっていたわ。だって私の部屋に勝手に入る人がこの都市の中にいるわけないもの。

入った時点で重罪だしね。」

この女性には絶対に敵わんな。そう思っていると。

「それより、あなたがしていたことを説明してくれるかしら。」

仕方あるまい。

説明中

「なるほどね。まあいいわ。」

ん？こいつ、今何と言った？

「お前、通報しないのか？」

「ええ。それとも、通報して欲しい？」

「いや。してもらわない方が助かるが、いいのか？」

「いいのよ、あなたは私が捕まえたのだから、その扱いも私の自由でしょう？」

まあそういうことなのだろうが、大丈夫なのか？

「そんな事して大丈夫なのか？お前の立場的に。」

「大丈夫でしょう。ここで私に意見できる人はそんなにいないわ。」

こいつ、それだけの立場なのか。

「そんなことよりあなたの名前は？」

名前だと？

「あなたの名前よ。なんて呼べばいいか分からないじゃない。」

そういうことか。

「神羅だ。創理　神羅。」

「そう。神羅ね。それで、あなたがどうやってこの都市に入ってきたのか教えてくれるかしら。」

「ちょっとまってくれ。俺はお前の名前を聞いてないんだが。」

俺はこの女性の名を聞いていない。だが、女性の容姿を見るに、誰かは分かってしまう。

「私？私の名前は？？？？。

・・・・・・・・聞き取れないかしら。ならこっちの名で呼んで頂戴。私の名は――――」

この、半分赤、半分青の服装。そして銀色の髪を後ろで三つ編みにして束ねているこの女性。

この容姿から推測出来る人物、未来では月の頭脳と呼ばれ、蓬莱の薬を作った、

東方ｐｒｏｊｅｃｔの原作登場人物。その名は――――――――。

「永琳。私は八意　永琳。皆からはそう呼ばれているわ。」

これが俺と原作登場人物の最初の出会いだった。

質問（前書き）

今回かなり強引になってしまいました。

質問

俺は永琳と出会い、潜入方法を説明した後。自分の能力を教えた。

「なかなか興味深いわね。あなた。」

永琳はそう言った。

「こんなに何かに興味を持ったのは久しぶりだわ。」

永琳はこう言うが、いったい他は何に興味を持ったのだろうか。

永琳は人間の中の天才と呼ばれる中でもトップクラスの頭脳を持っているようだ。

そんな彼女が興味を持つものとはいったいどんなものなのだろうか。

「あら、何か気になることでもあるの？」

そう考えていると、永琳が話しかけてきた。

「お前は心が読めるのか？」

俺は何も喋っていない俺に対して、心を読んでいるかのような発言が気になった。

「いいえ、読めるわけないじゃない。表情で分かるのよ。今まで何

千、何万人と腹の探りあいをしてい
てから。」

そういうものなのか？

「そういうものよ。そんなことより聞きたいことは？」

そういうものか。ひとまず聞いてみるとしよう。

「お前みたいな天才が興味を持つほどのものがそんなにあるのか？」

俺は自分の疑問をぶつけた。

「そりゃあるわよ。昔から代々続く家系に不思議な力があったりとか、今の人間の進化のきっかけとか。」

なんか両方気になるな。

「不思議な力？」

「ええ。その家の人は代々不思議な力を持っている人がいるの。その人のいる地域の時間の進み方が早くなったりするみたいな感じで、まるで時間の感じ方が範囲の外と違うようになるみたいなの。」

それで一部の進化が早いのか？

それにしても時間だけあってもなぁ。

数百年間生きているんだが、外部から技術が入ってきていたのか？

「なあ、ここの技術は誰が発展させているんだ？」

「私よ。ここ、そうね、外の時間では２００年くらいかしら。まあ私が生まれて少しからはね。それ以前は道具によって発展したらしいわ。」

「道具？」

「ええ。一番昔ので言うと、鉄製の棒とかかしら」

棒？それってまさか

「後になってくると色々形が変わっているものも発見されているけど。

色んな材質のものだったり、見つかるたびに解析したり、用途を考えたりしてるわ。」

親父、異常な進化の背景には、俺の能力の修行があったようだ。

「なあ。ここの時間の流れは外の何倍なんだ？」

「時間？そうね、１００倍以上かしら。」

となると、俺の修業中５００年ほどで５００００年以上か。

ずいぶん長いな。

そう思っていると永琳は

「でももうすぐその時間の進み方は変わるわ。その力をもった人が少なくなってきたの。

私はその力を研究して、極限まで老化を止める薬をずいぶん前に開発したわ。

でも、飲んでくれなかったわ。自分達が研究されている感じが嫌って言ってね。」

それに、と永琳は続ける。

「最近は外の妖怪が増えてきて、力が強くなっているようなの。」

それに対し俺は

「でも今の技術力でも十分対抗できるだろ？」

「ええ。でも妖怪は数が少ないかわりに生命力や力が私達とは比べ物にならないの。

そして私たちが進歩するように、向こうも進化するの。

だからこそ私は結界を作ったわ。こちら側に妖怪がこないように。」

それでも俺はそこまでする必要がないと思った。

「そこまでする必要が本当にあるのか？」

「普通の妖怪には必要ないわ。でも時々力が飛び抜けた個体もいるのよ。

知能は低いんだけど。その分凶暴でね。街の中に入ってきたこともあるわ。」

もしかして街の周りのあの柱は結界のためのものか？

しかし本当に気になるのはあの資料の計画だ。

妖怪と何か関係があるのか？

「なあ。月に行く必要があるのか？月って石だらけじゃないのか？」

「月？ああ移住計画ね？あれは私たちの都合よ。私たちは寿命があるじゃない？

最近は穢れというものが寿命の原因があるように考えられているわ。

その穢れが地上に溢れているから、穢れのない月に行こうって話よ。

それに、人間の技術力を使えば月くらいすぐに住めるようになるわ。」

「そのあとの街はどうなる？」

「破壊するわ。跡形もなく。」

「そんなことしたらこの星が大変なことになるぞ。」

「仕方ないじゃない。ここの技術を妖怪たちが使わないようにするだけよ。

私たちも必死なのよ。人間全体を考えるとね。」

まあそう考えると納得できなくはないが……。

「これで計画の基本的なことを話したわ。

この話はここでお仕舞い。あなた、今日はここに泊まっていけばいいじゃない。」

まあこれ以上話しても変わらんか。

「ああ。そうさせてもらおう。」

俺はそう言い、一日を終えた。

質問（後書き）

強引で本当にすいません。

移住（前書き）

時間が少し飛びます。

移住

俺は今、都市のの中心のビルの一室のいる。

時間軸的には永琳と出会って２００年以上経っただろうか。

人間が月に行くのは数日後だろう。

そして、親父からもらった腕輪に最近ヒビがはいってきた。

そんな時、俺は何をしているかというと。

「うーん。まだ厚いか？」

能力であるものを作ろうとしていた。

「それにもっと広くしないとなぁ。」

俺が作っているもの。それは

「もっと硬いものじゃないと盾にはならんな。」

そう。盾である。それも結界を応用したものだ。

もちろん普通の盾くらいは作れる。

しかし俺が今作ろうとしているものは攻撃を反射する仕様のものだ。

そのための盾の形を作るのだが、できるだけ膜のようなものをつくるつもりだ。

出来るだけ薄くし、見えづらいものを作りたいんだがなぁ。

「難しすぎる……。」

これ、完成するのか？

そう思っていると後ろから永琳が、

「あら、まだやっているの？よく飽きないわね。」

と言う。

「永琳。来てたのか。」

「今さっきね。そんなことより、私たちはもうすぐ月にいくんだけど、あなた、本当に残るの？」

永琳が来た理由はそれか。

そう。俺は月には行かない。

そもそも俺が行く必要性を感じない。

誰が好き好んで岩だらけの場所に行くだろうか。

「そう言うなら仕方ないんだろうけど。私たちが月に行くときは気を付けて。

都市と街、全部爆発するから。」

まあそうしたら妖怪は結構死ぬと思うけどね。

まあ一つ不安なのは妖怪なんだけどね。

何か最近妖怪が活発なんだよな。

月に行く際には一箇所に人が沢山集まるから

妖怪が誘われてきそうなんだよ。

人の多いところに沢山現れる節があるからなぁ。

「まあ都市から離れていれば大丈夫と思うわ。」

まあその時はそのときだな。

そして、移住前日。

人間の全員がこの都市の内部に集まった。

ついに明日、出発か。

「明日、か。」

俺は今都市から離れていた。

「それにしてもやっぱり大きいな。」

都市は俺が来た時より1回り大きくなっていた。

しかし、長かったな。

それにもう親父からもらった腕輪が砕けそうだ。

嵌めているところが痒い。

そう思っていると、

ピピピピピッ

という音が鳴った。

なんかひさしぶりだなこれ

と思いつつ端末を見る。

『おお。久しぶりじゃのう。おまえ、ワシのこと忘れとったじゃろう。』

いやー、まあ間違ってはないな。

「親父、なんでこのタイミングでかけてきたんだ？」

『うむ。おまえに送った腕輪がそろそろ外れる頃じゃとおもってのう。』

「まあ砕けそうっちゃ砕けそうなんだが。」

『それ、砕いてもよいぞ。』

「は？」

『いや、それ、砕いていいぞ。その腕輪が能力のストッパーなんじゃが。もう必要ないじゃろ。』

「そうだったのか？」

『うむ。外したらもっと自由度が増すじゃろうし。今のお主じゃったら大丈夫じゃろ。』

「そういうことなら……。」

ていっ　パキッ

俺は腕輪を叩いて割った。すると、

……ブワッ！

割った瞬間、俺の周りに風が吹いた

『外したことでもっと簡単に能力を使えるじゃろう。』

俺は自身の中に何かの力があるのを感じた。

『何かを感じるじゃろう？』

「ああ。しかし、なんだこの感じ。」

『それはあれじゃ、霊力や魔力じゃろう。』

「それはどう扱えばいいんだ？」

『知らん。おまえならなんとかなるじゃろう。イメージじゃよ、イメージ。』

また、そんなアバウトな。

「まあいいか。で、他になんかないのか。」

俺はそう聞いてみる。

『そうじゃのう、あと言いたいことといえばのう。人間たちが襲われとるということくらいかのう。』

「そうか、人が襲われて――――――――――――」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――は？

ええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ。

「おい、それを先に言ってくれよ！」

俺がそう言った瞬間。

ドオォォォン！

という爆音が聞こえてきた。

移住（後書き）

適当になってきてすみません。

妖怪集結

神羅と親父が話している頃――――――――――。

都市近郊。

「よし。全員集まったか？」

そう言ったのは周りのやつより一回り大きい人型の個体。

「もう少しで集まります。」

そういうのは少し小さめの個体。

今ここへは数万の妖怪たちが集まっていた。

「そうか。向こうには気づかれるなよ。」

この妖怪を束ねている妖怪は集団の中でも長く生きている奴だった。

この妖怪は火の妖怪である。

人間は火の発見により暖をとり、厳しい冬をも越える術を得た。

加熱することも覚えた。また、金属の加工にも火が必要である。

しかし、火は大変危険である。すぐに人の命を奪えるものである。

故にこの個体は生まれた。仲間からは烈火（れっか）と呼ばれている。

そして長く生きていることで強大な妖力を得た。

「あいつらが油断している今なら行ける。」

そう。人間は油断しきっている。結界があるから安心しきっている。

そこを突くためにこの日を選んだ。

そして人間が月に行くという情報を得たものもいる。

例えば人間の社会が情報社会だとする。そこで、人を騙し嘘の情報を流す者が現れるとする。

そうすると誰かが引っかかる。そして、そのことに対して、怖いと思う人が増える。

そうなると情報や嘘に対する恐怖から新たな妖怪が生まれる。

だからこそ妖怪は増える。このようなことがある故に妖怪と人間は進歩し増えつづける。

妖怪たちは怖いのだ。今まで地上にいた人間が月に、自分らの知らないところへ皆で行く、

ということに。

そして残った我々はどうなるのだ、と。消えてしまうのではないかと。

だから妖怪も行動を起こした。人間が月に行く前に。

消えるかは分からない。でも、それでも不安なのだ。

自分らは何もしていないのに消えるかもしれない。ということに。

この可能性に、理不尽に抗いたいのだ。

だからこそ襲う。襲わずには居られない。

そして、全ての人間に、人間の心に。

恐怖を。根源的な恐怖を刻むために。

妖怪たちはもう止まらない。その総てを持って挑む。

敵わないのは分かっている。しかしその事実に抗いたい。

何もせず消えるのは悲しいから。

腕が飛ぼうと構わない。

足が飛ぼうと止まらない。

妖怪たちはただ進む、死に絶えようとも進む。
別に恨みなどない、ただ魂が疼くのだ。
魂が人間を求めるのだ。
妖怪としての本能が叫ぶのだ。
人間の恐怖から産まれた故に。

血が欲しい。

肉が欲しい、と。

しかし思考の中心にあるのは生物としての本能。
ただの生存本能。
皆は同じ思いを持ち突き進む。

ただ一つの思いを持って。

ただ一つ。

――――――――――――――――――――――――消エタクナイ。

妖怪集結（後書き）

なんか微妙な出来具合になってしまいました。

戦闘

親父との通信を終えた後、俺はすぐに都市に向かっていた。

あの爆音、あれは外壁への攻撃だろう。

いくら外壁が頑丈であろうともあの大きさだ。きっと抜かれたのだろう。

そうでなくともかなり削れているはずだ。

内部の人間はパニックに陥るだろう。必ず。

そして月への移住を早めるだろう。

だが、パニック状態に陥った人達をうまく整理するのは難しいだろう。

そうしているうちに人が次々に死ぬはずだ。

更に妖怪が人間側の武器を使い始めたら最悪だぞ。

俺はそう言い、時間短縮のために、

新たな力、霊力を足に貯め始めた。

その頃の都市外壁部。

「殺せ、殺せ、殺し尽せ！逃げる奴ごと殺せぇ！」

妖怪のリーダー格、烈火は見事外壁の破壊に成功していた。

（長年妖力をためててよかったぜ。）

烈火は心の中でそう思っていた。

ぶち壊した外壁から仲間達を送り込みおわった烈火だが、

勢いだけは止まらない。勢いだけは止めてはならないのだ。

基本的に数、戦力が違う自分達が負けるのは分かっていた。

それでも多く殺すためには勢いで進むしかなかった。

この奇襲とも言える襲撃で相手が混乱しているうちに削るしかないのだ。

最終的に死ぬのは自分達だ。それが分かっているからこその行動だ。

現にかなり殺した。一瞬のうちに数万。今もどんどん増え続けている。

向こうの兵にも数千程度削られたが、まだこちらが押している。

ならやることは簡単だ。暴れればいい。

そう思い俺は人間の大群に突っ込んだ。

「よし。」

足に霊力を溜め終わった俺は都市の方向、穴のあいた外壁を見た。

「いくか。」

俺は今から跳ぶ。

そう、跳ぶのだ。

少し小高いところにいる俺は、

「防御結界、想像、実現。」

そう言って、俺の前に盾を展開した。

これは速度に耐えるためである。

今足に溜まっている霊力を爆発させると、ものすごい速度が出るだろう。

それに耐えるためだ。

そして展開し終わった俺は、都市とは逆方向に足を向け、

霊力を爆発させた。

ものすごい速度で翔ぶ。

足が熱い。それは爆発させたんだ。熱いだろう。

そう思いつつ俺は足にまた霊力を溜め始めた。

もうすぐ妖怪達の上空だろうか。

そう感じた俺は足を空に向け、防御結界に霊力を込め始めた。

そして妖怪たちのちょうど上空の前あたりで

足の霊力をまた爆発させた。

そのまま俺は妖怪達に突っ込んだ。

烈火は焦った。

後ろの方に何かが落ちてくる音がしたからだ。

後ろは仲間の妖怪だけでこんなことができる奴が居ないと知っているからだ。

もし挟み撃ちにあったら自分らはすぐ負ける。

それは、それだけは避けたいのだ。だから戦力をひとつにまとめているのだ。

1対1にぶつかり合いなら互角以上で戦えるから。ただひたすら進むだけだから。

そうしてきたからこそ相手の屍も味方の屍も進んだあとしか残らない。

後ろから敵が来たら、戦力が分かれる。それじゃあ負ける。負けてしまう。

我らは妖怪。力だけは強い。

なら、嵐のごとく攻め、嵐のようにこの世を去ろう。

ただ吹き荒れる風のように。被害だけを残す天災のように。

だからこそ進む方向は1つ。

そう決めたのに。そう決めたのにッ！

なのに、なのにッ、なのにどうしてッ！

――――――――――――――――――――――――――――――――

―――

俺は突っ込んだ。何も考えず。ただそこに。

そして結界を破裂させた。

周りは飛ぶ。妖怪が飛ぶ。

妖怪は俺を攻撃する。俺は避ける。ただそれだけ。

そして俺は想像する。

武器を。こいつらを殺す。ただひたすら生命を狩るための武器を。

幻想を。こいつらを還す。ただ天に魂を送るために。

それは夢、妖怪を救うためのただ今だけの。

この時だけのための武器。全ての生命を浄化する。

消えた者たちを祝福する。

そんなことは夢のまた夢。そして不可能な幻想。

だからこそ俺は想像する。

それを成し遂げるための奇跡を。

さあ今こそ――――――――――――――――！

――――――――――《実現》――――――――――！

全てをの魂を、夢を救え。

「このひと振りは救うために。」

己の心を形に。

「心刀、夢仇――――――。」

この刀が具現化した瞬間。

すべての妖怪は恐怖した。

自分を確実に殺すものの存在に。

それと共に安堵した。

自分を、自分達が救われる。ということに。

――

――

そして俺は動いたすべての妖怪を殺す（救う）ために。

俺は斬る。妖怪を斬る。

どれだけ血にまみれようとも。どれだけ血を流そうとも。

刀を振ることだけは止めない。

屍は俺の後に。ただひたすらに殺し（救い）続ける。

そして烈火は恐れた。

己の後ろの生命に。

屍だらけの道に新たに屍を作りながら進む一つの生命に。

恐怖から生まれた妖怪が恐怖したのだ。

それと共に烈火は安堵した、

この自分を止める存在に。

今の気持ちは全くわからない。

これは恐怖（安堵）なのか。

それとも安堵（恐怖）なのか。

分からない。分からない。分からない。
自分を殺す者に感謝をすべきか？
それは違う。
では、自分を救う者に感謝をすべきか？
それはそうだ。
ではその両方の者には？
答えが出ない。
分からないのだ。今までこんな奴はいなかった。
分からない。だから狂う。
力がある。故に迷う。
だからこそ考えることが出来なくなる。
不器用ゆえに判断できぬ。
どちらにしろ止まれないのだ。
もう仲間はほとんど死んだ。
ならば最後くらいは派手に行こう。

ただ前に進むために。

誰かに覚えていて欲しいから。

――――――――――――――――――――――――――――――

――

もう人間は殆ど月へ行ったのだろう。

残っているのは兵隊くらいだろう。

いや残っていないかもしれない。

しかしそんなことは考えなくていい。

俺のやることは殺す（救う）こと。

すべての妖怪（生命）に死（救済）を。

だから俺は斬る。斬って、斬って、斬り続ける。

妖怪も後僅かだろう。

そう思って進むと一回り大きな奴がいた。
おそらく、いや、絶対こいつが大将だろう。
もう周りには屍しかない。屍しか残さない。
残るは俺と屍、それだけだ。
「さあ、俺がお前を殺して（救って）やる。」
そう言うと相手は炎弾を放ってきた。
俺はそれを避けつつ近づく。
体はもう限界に近い。相手もそうだろう。
だが退けないこいつを殺す（救う）ために。
近づくと相手は火を放ってくる。
しかし俺は止まらない。ギリギリで避け、さらに近づく。
相手がさがるが間合いを詰める。
そして相手は炎弾を放ち。爆発させた。
しかし俺は前に跳ぶ。
そして爆風に乗り相手を斬る。

その斬撃は相手の右肩を捉え、右腕を切り離した。

だが相手は左手で炎弾を放つ。

どうやら右腕一本じゃ止まらないようだ。

俺は放たれた炎弾に対して突っ込んだ。

左手に霊力を纏わせて抜けたが。火傷したようだ。

しかしそのまま相手に向かって走る。

そして相手にあと2メートルのところで相手は炎弾を放った。

避けきれない。そういう攻撃だった。

相手はもう力尽きるだろう。これは最後の攻撃だろう。

俺の体は勢いに乗っている。これじゃあ絶対当たる。

そうしたら俺は死ぬだろう。

だからこそ俺は前に出た。

防御結界の盾を斜めの状態で展開して。

そして俺は相手の左肩から心臓ごと斬るように思いっきり振り抜いた。

相手はまっぷたつになった。

もう再生しないだろう。

あと俺がやることは一つ。

祈りを込める。

この刀に祈りを込める。

この屍たちが救われるように。

そう祈りを込めて、俺は刀を破壊した。

これはもう必要ない。

この刀はこの時だけのものだから。

もうここには用はない。

俺は少し疲れた。

行くところはあそこしかない。

そう思い、俺は最初にいたあの洞窟に向かった。

洞窟の周りには草が生い茂っていた。

入口がどこかは全くわからない。

と思っていると、草が左右に動き始めた。

まるで道を作るように。

そこを進むと洞窟の入口があった。

周りの草はまるで主人を案内するかのように動いていた。

その通りに進むと。あれがあった。

そう。世界樹の苗木だ。

俺はこれを何百年放置したのだろう。

俺が完全に忘れていても、こいつは俺を覚えていた。

まだ１ｍ位で幹も細いが少し育ったようだ。

そして俺は眠ることにした。

今度は少し長く眠るだろう。

そして、月から放たれたであろうものの爆音を最後に、俺の意識は途絶えた。

ただ、俺が相手を斬るとき、相手は「ありがとう」と呟いたように見えたのは俺の気のせいだろうか。

第一章　完

『こいつはなんともまあ無茶しおったのう。

しかしこれから寒くなりそうじゃ。

目が覚めるまで、色々サポートしてやるしかないのう。

……それにしても、

こいつの成長速度で行くと、

そのうちワシを超す日が来るのもそう遠くないかもしれんのう。

もともとこいつには神になる素質があったようじゃし。

あと足りんのは経験と信仰あたりかのう。』

戦闘（後書き）

やっと終わりました。長かったですよ。
この次からは諏訪大戦の辺りを書きます。

オリキャラ設定

名前：烈火（れっか）

能力：「火を操る程度の能力」

種族：妖怪

この時代の妖怪の大将。

火を操る能力だが、何かを溶かしたり、発熱が可能。

人型で身長は２ｍを超す。

今回の襲撃は昔から考えていた。

そのために、妖力を溜めていた。

ちなみに、今回の襲撃で妖怪は全滅したが、

人間も３０％を超える被害に遭う。

はい、オリキャラ設定です。

本来。全く出す予定はありませんでした。

今回も思いつきです。

ちなみに、

私が詳しく決めてたのは主人公設定だけで。

それ以外は思いつきで書いていました。すいません。

そうなので、かなり間違ったところがあると思います。

そういった点にお気づきの方は、

感想の方に書き込みをお願いします。

目覚め

ここはとある山の中。長い間誰も立ち入らず、草が生い茂っていた。
更に、年中ぼんやり光っているものだから、
皆は「魔物が住んでいる」と言い、大変恐れていた。
だが、こんな山にも人影が。
特に草の高いところを進む一人と一匹がいた。
その一人が一匹の白蛇を追いかけていた。
「ちょっとまってください～。ミシャグジ様ぁ～。」
この者の名は諏訪子。ここの近くの地域を統括している神なのだが、
まだ見習いなので、力は弱い。
「ミシャグジ様ー。なにか見つかったんですか？」
対する白蛇の名はミシャグジ。祟り神の一種だ。
祟り神であるが人間からの信仰は厚い。
諏訪子より力が強く、所謂上司のようなものだ。

「ミ…ミシャグジ様。ここを進めって言うんですか？」

今諏訪子達がいるのは山の頂上付近。

草の高さは一階建ての家を超える位あり、これまでの所とは違い、密度も半端ない。

草がまるで壁のように集まっている。

そしてぼんやり光る粒子の密度もほかのところとは段違いだ。

諏訪子の嫌そうな声の質問に対し、ミシャグジは早く行けと言わんばかりに頷いた。

「ミ、ミシャグジ様ぁ～。ここ、どう進めばいいんですかぁ～。」

諏訪子はもう泣きそうである。

諏訪子たちがこの山に来たのは昼頃である。

だが、草が邪魔して進みにくかったのか、日はもう落ちかけ、夕方頃だった。

だがミシャグジは諏訪子を気にせず、行けと言うかのように諏訪子の背中に体をぶつけた。

「あうっ、ミシャグジ様ぁ。い、行けば、行けばいいんでしょぉ。」

諏訪子は消え入りそうな声で言う。

ミシャグジは頷く。

「うぅぅぅ。……やぁっ！」

諏訪子は、そう言いつつ、思いっきり草の壁目掛けて、体当たりするように跳んだ。

その瞬間、

草はまるで道を作るかのように左右に避けた。

諏訪子は飛び込んでいる。

「……へ？」

？ゴスッ？

諏訪子は突っ込んだ。

地面にそのまま突っ込んだ。

そのとき、諏訪子の頭に激痛が走るッ！

「いったあぁぁぁーーーーい！！」

諏訪子は地面を左右に転がる。

「痛い。」

痛いと頭を抑え連呼している諏訪子だが、ミシャグジは草が避けて作った道を進む。

「痛い痛い痛いいｔ……ミ、ミシャグジ様っ！置いていかないでくださいよぅ～。」

諏訪子は頭を抑えつつ後を追う。

少し進むと今までの道より広めの場所へ出た。

「ここが終わり？……ミシャグジさま？」

諏訪子はミシャグジのいる方を向く。

「ミシャｇ……こんなところに洞窟？」

ミシャグジは洞窟の前から洞窟の中のほうをみていた。

そして諏訪子の方を向く。

「なんでこんなとこに洞窟が？……ってミシャグジ様、まさか進めと？」

諏訪子はこちらを見ているミシャグジ様に聞いてみる。

するとミシャグジはすぐに頷く。自分に拒否権はないようだ。

「わかりましたよ。行きますよ、行かなきゃいけないんでしょう。」

諏訪子はもう諦めたようだ。

ハァ、とため息をつきつつも諏訪子は進む。

洞窟の中は明るかった。ぼんやり光る粒子が大量にあるからである。

「この光ってなに？」

諏訪子は疑問を持つ。

少し進むと、これまでとは違う、昼間のように明るい光を放つ場所があった。

「あそこ、何か、ある？」

諏訪子はその場所の中心に何かあるのを見つけたようだ。

「あれは……木？でもなんでこんなところに？」

そう、木だった。この洞窟の奥に一本だけ、木があったのだ。

そして諏訪子はその木に寄りかかっているものの存在に気がついた。

「あの木のそばの……ひ、人ぉ！？」

そう、人間だ。木に寄りかかっているのは人間だった。

「う、うそでしょ？なんで人間がここに。」

そう言いつつ近寄る。どうやら男性のようだ。

体中傷だらけで、生きているとは思えない。

「ちょっと？あんた、死んでるの？」

すこし体を揺さぶる。しかし返答はない。

諏訪子どうしようか迷っているその時。

ピクンッと

この男性の体が動いた。

……え？

諏訪子は驚いた。死んでいると思った人間の体が動いたのだ。

「え？い、生きてる？生きてるの？ミ、ミシャグジ様ぁ～。」

諏訪子はミシャグジに助けを求める。

だがミシャグジは一点を見つめたままだ。

ミシャグジは男性の体を見たまま、微動だにしない。

その時、

「……ぅ…ぅぁ……。」

と、男性の口から声が漏れた。

「い、生きてる。この人生きてる。ねえ、起きてっ。起きてってば！」

諏訪子は強く揺さぶる。すると、

「お、まえ、だ、誰だ？」

と男性が目を開いた。
それを聞いた諏訪子は、
「よ、よかった。本当に生きてた……。はふぅ。」
と言い気を失った。

「……と…ん……んで……の？」
声が聞こえた。
俺の近くに誰かいるのかと思い、俺は体を動かそうとした。
ん？体が動かない？金縛りか？
俺の体は思うように動かなかった。
少し寝すぎたのだろうか？
もう一度動かそうとした。次は指が動いた。

「…き…き…てる……シャク……ま」

俺の近くの人物が何か言っている。

声の高さからして女子供だろう。

俺は喋ろうとする。

「……ぅ…ぅぁ……。」

うまくしゃべれない。

こうして困ってると。

「……きて、…きてってば！」

という大きな声とともに俺に体を強く揺さぶった。

ぐえっ、脳が揺れる。

こんなことする奴は誰だ？

そう思い俺は目を開きつつ、

「お、まえ、だ、誰だ？」

と言った。

目の前にいたのは子供だった。

金色の髪の子供、髪の長さや容姿から推測するに少女だろう。
なぜこんなところに、少女が？
そう考えていると。その少女はこちらに倒れ込んできた。
そして、今ここにいるのは俺と気絶した少女と白い蛇だけのようだ。
ひとまず、時間を確認せんとな。
そう思った俺は洞窟の外に向かった。
少女と世界樹を抱えその上に蛇を乗せながら。

それにしても世界樹、今３ｍより低いぐらいか。
ようやく木らしくなったな。

さて、洞窟の外に来たわけだが。
草が生えまくってやがる。絶対マナ影響だな。
草の生えた場所を抜け、見晴らしのいいところに来た。

だが俺は目を疑った。何もないのだ。そう何も。
今俺が見ている景色はただの平原。
普通なら何もおかしいとは感じないだろう。
だが、俺は違う。おかしいと思った。
ないのだ。アレがないのだ。あの跡は残るはずだろう。
月が、月の住民が放った爆弾の後は。
俺は眠る前、爆音を確かに聞いた。
でもなぜ、何もない？
穴くらいは残っているだろう？
しかしそこで俺は気付く。自分の抱えているものに。
「おい、起きろ。」
そう言い、俺は少女を揺さぶる。
「んぁ……何？」
少女は目を覚ます。
「おい？この辺で爆発があっただろう？あれはどうなった？」

俺は少女に問いかける。
「ん？そんなこと？人間なのにずいぶん昔のことを知ってるね？
何か私が生まれるずっと前にいろんなとこが爆発したらしいね。
まあ私は詳しく知らないんだけど。」
と少女が言う。
この話が本当ならば、俺はどれだけの間眠っていたんだ？
「なあ、それってどのくらい前だ？」
すると少女は、
「さあ？知らない。でも私が生まれる前だから数千年より前だと思うよ？
私が生まれる少し前はすごく寒くて生き物も全然いなかったらしいし。」
なんということだ。なら俺は氷河期を越えたってことか。
いったい何万年寝てたんだよ俺は。よく死ななかったな。
「でも運が良かったよね。私に見つけられて。
あの洞窟じゃあ誰も見つけられないかもしれなかったし。」

まああそこは見つけにくいからなあ。いやまて。

「ならどうして君はあそこにいた？」

「諏訪子。」

「え？」

「私の名前。私は諏訪子。いつまでも君とかお前じゃやりにくいじゃん。」

諏訪子？もしかしなくても洩矢　諏訪子なのか。

俺はどんだけ寝てたんだ。全く。

まあそこは置いておこう。でもここって諏訪地方だっけ？

「で、あなたの名前は？」

向こうが名乗ったら名乗らないといけないか。

「神羅だ。創理　神羅。」

「しんら。神羅、ね。よし覚えた。」

諏訪子はそう言う。

「しかし諏訪子はなんでここに？」

「そのことだけどね。私、神様やってるの。」
諏訪子は、まだ見習いだけどね。と付け足す。
「でも神様がどうしてここに？」
諏訪子は、あ、神様の部分には驚かないんだ。と残念がって言う
「いやー。他の神様に頼まれてね。私より立場が上の神様だったし、断りにくいじゃん。で、内容はここの調査なんだ。
なんかこの山がいっつもぼんやり光ってる。っていうことらしいんだ。」
絶対にマナの影響だろ。それ。
「それで、仕事を頼まれた私はここにやってきて神羅を見つけたって訳。」
神様にもいろいろあるんだなぁ。
「で、ここに来た理由は分かったが、この後どうするんだ？」
そう言うと諏訪子は、
「うーん。とりあえず、うちに来たら？ここにいたなら泊まる場所とかないでしょ？」
と笑顔で言う。

それは正直ありがたいので、

「そうするよ。」

と一言。

その後飛んで行ったのだが、俺は何故飛べたのだろうか。

「とうちゃ～く。」

俺と諏訪子、そしてミシャグジは諏訪地方にある神社？と言うには少し大きく感じる所へ来ていた。

「ここが私の家だよ。さ、上がっていって。」

と諏訪子が言うので建物の中へ入った。

そして、

「この部屋、自由に使っていいからね。」

と諏訪子が俺の部屋まで準備してくれた。

ここまでしてもらっていいのだろうか？

そう思っていると。

トットットットットッ

という

子供が走ってくるような、

着信音が鳴った。非常に紛らわしい。

『聞こえとるかのう。今回の着信音は「無駄な効果音！百選！～神界版～」

から選ばせてもらったぞ。』

「聞こえているが正直紛らわしいからやめてくれ。」

『まあその内のう。いや、しかし生きてて良かったのう。
あの後かなり眠るもんじゃからわしも眠ってしまったわい。
……そろそろ本題に移ろうかのう。』
最初からそうしてくれ……。
『では話そうかのう。
実はお前の能力がのう。体に馴染みきったのじゃ。めでたいのう。
それでのう。また使い勝手が良くなったと思うんじゃが、
出力は８０％位までに抑えとくぞ。１００％以上にするのはまた別の機会にすることにしたわい。
まあそう心配するんじゃない。今の力だけでも妖怪はおろかそこらへんの神だって殺すのは容易い。
まだそのレベルなんじゃ。お前の能力は。あとお前の身体能力も上がっとるからのう。
少しばかり特殊なことをやったって大丈夫じゃから、色々試してみるといい。
あ、あと能力を使うときにわざわざ〈実現〉て言わんでも、
何か名前を決めとけばすぐに出せるからのう。それじゃあ、しっかりのう。』

ふむ。技名、スペカみたいなもんか？

まあやれば出来るだろう。

ガラッ

部屋の扉が開く音がした。

「神羅ー。ご飯だよー。」

諏訪子が呼ぶ。もうそんな時間かそう思いつつ部屋を後にした。

仕事

諏訪子の家に住み始めて1週間、俺は諏訪子の手伝いをしていた。

なぜそうなったかというと

――

――俺が諏訪地方に来た翌日。

「この辺りの地域の人はね、ミシャグジ様を信仰してるんだ。」

「ミシャグジ？」

「うん。神羅も知っているでしょ。私と一緒にいた白い蛇。

あれがミシャグジ様の一人なんだ。」

ミシャグジって沢山いるのか？

「一人？ってことは他にもいるのか？」

「いや？ミシャグジ様は一人だけだよ。ただ各地に散っているんだ

よね。

広範囲で信仰を得るために。」

やっぱ神様にもいろいろあるのか。

「そしてこの諏訪地方は、私が治めることになっているんだ。

まだ見習いだからミシャグジ様の土地だけど、

私の力で土地を豊かにすることが出来るからね。」

ミシャグジってどんだけ強いんだ。

「諏訪子、その力ってどういうやつなんだ？」

「んーとね、大地を操れるんだけど、創り出すことができるから、

そうだね「坤を創造する程度の能力」かな。神羅もなにかあるでしょ？」

「なぜそう思うんだ？」

「だってあんなところにいたんだよ。ただの一般人のわけないじゃん。」

いや、まあそうなんだが。

「それに神羅がもってた木があるじゃん。あれ、何か普通の木じゃないでしょ。」

まあ世界樹だからな。

「私の能力だから分かるんだけど、あの木、養分を吸うんじゃなくて、

逆に周りに与えてるようなんだよね。だからあの山、養分が普通の山の数倍あったし。」

せ、世界樹さん。あんたどんだけ凄い木なんだ……。

「まあ、だいたいあってるかな。」

「じゃあ教えてくれるよね？神羅のこと。」

全てばらしたほうが楽かもな。

「ああ。話そう。俺の能力は「幻想と現実を司る程度の能力」だ。」

俺の能力名、ながくね？

そう思っていると諏訪子は「？」という感じで、

「ねえ、それってどんなことができるの？」

まあ大体の反応はこうだろうな。俺も能力の限界とか知らないし。

「どんなことって言われても……どんなことでも？」

「いやぁ。曖昧だね。」

仕方ないじゃないか。わからないんだから。

「うーん。……ねえ。」

「なんだ？」

「神羅の能力って私の能力の真似事、出来る？」

いきなりこの子は何を言い出すんだ。

「知らん。」

俺はそう返す。

「じゃ、じゃあさ、試してみてくれる？」

諏訪子がそう言うから試してみた。

俺たちは外に出る。そして少し広い土地に移動した。すると諏訪子が

「ここは誰も使ってなくてね、なんにもしてなかったから土地が痩せてるの。」

まあちょっと雑草が生えている程度で乾いた土地だな。

「まず私が手本を見せるから神羅も自分なりの方法でやってみて。」

すると諏訪子は地面に手をかざした。

すると、手をかざした辺りに花が咲いた。

「いま私ががやったことは、土地に栄養を与えて、植物の成長を促進させたの。

まあ養分を与えすぎるのはあんまり良くないんだけどね。」

と諏訪子は言う。

急激に栄養を与えると育ちやすいが、植物に悪いんだろう。

「だからこうして種はまいて、そのほかも地面にまくの。」

諏訪子は、養分になるからね。と言い、花の種をまき花を枯らす。

ふむふむ。なるほど。

「まあ養分が足りないだけで種はその辺に落ちてると思うから、とにかくやってみて。」

強制的に咲かせたあとは地に戻すのか。

そう思い考える。

周りを見る。何かの種がある。また種、木の枝、種、種、……

ん？あ、あれは…。

俺は一点を見る。俺の目線の先には、倒れている木の幹、そして、

ひとつの切り株。
それを見ている俺に気がついたのか。諏訪子が
「し、神羅。もしかしてあれでやるの？」
と、聞いてきた。だが俺はそれを無視。そして切り株の近くへ移動。
その際地面に落ちてた木の棒を拾う。
「ねえ、さすがに最初にこれは難しいと思うよ？」
まあやってみないと分からないからな。
そう思った俺は地面に線を引く。切り株を囲むように。
「神羅。その木、腐ってるんだけど。」
諏訪子が言った。それを聞いた俺は持ってる木の棒を強化する。
そしてその棒を倒れた木めがけて振り下ろした。
そして砕いた木片を切り株の周りの撒いた。
これで準備は終わったか。さて、
「諏訪子、心配などするんじゃない。」
「いまからこれをどうするのさ。」

「まあ見てな。」

そう言い俺は地面に触れる。

そうだな、理想の形は森、か？それならこの切り株を中心にして、

俺はこの辺が森になる映像を想像する。

そういや〈実現〉って言わんでもいいんだっけ？

そうだな…ならば、俺は切り株を見て、

自分の想像と重ねる。

すると木は育ち始めた。徐々に、徐々に。

横から諏訪子が

「わわっ、どうなってるのこれ！」

と言っているが気にしない。

切り株に新たな枝を生やし、育て育て育てる。

細い枝から太い枝へ、枝から幹へ、木から樹へ。

育つ育つ育つ。切り株から大樹へ。

このくらいか。

俺は顔を上げる。そこには立派な大木があった。
周りには緑があふれていた。確認を取るか。
「どうだった？これで良かったか？諏訪子？」
そう諏訪子にきく。
そうすると諏訪子は、
「どうだった？じゃないよ！なんなのさ！この状況！
成長とかのレベルじゃないじゃん！これじゃあもう再生じゃんか！」
「あー……、わ、悪かったなぁ。」
「あーうー。そう言われると私が悪いみたいじゃん。」
うーん、まあいいか。
「で、これはどうするんだ？焼くのか？」
そうだったら重労働だなぁ。
「……いや。悔しいけどそんなことしなくていいみたい。
養分が周りの土にほぼ均等に行ってるから。」
諏訪子は、今までの私の苦労は……。とつぶやいている。

「まあなんと言おうと合格だね。」
合格？なんのことだ？
「さて、神羅。」
諏訪子は俺の方を向き直す。何か言いたいことがあるのか？
「神羅には私の仕事を手伝ってもらうから。とりあえず明日からね。」
は？仕事
「なんの仕事をするって言うんだ？」
「土地の管理だよ。畑とか、田んぼとかに栄養を与えるの。
神羅が出来るか分からなかったんだけど、ここまで出来るなら即戦力だよ。
まさか居候の身分の神羅が断ったりはしないよねぇ？」
くっ……こ、断れない。
「やるしかないようだな？」
何か罠に嵌められた気がする。そう思いつつ俺は肯定の返答をする。
すると諏訪子は満面の笑顔で、

「明日からよろしくねっ。神羅っ。」

と言った。くっ、笑顔が眩しいっ。

俺はその翌日から諏訪子の仕事を手伝うようになった。

まあそんなことがあったからなんだが

「し～ん～らっ。次はあそこだよ。」

隣の諏訪子は前方の畑を指さした。

「はいはい。」

「ほら早くっ。」

諏訪子はここ最近ずっと楽しそうだ。

仕事を手伝い始めて毎日、こんな感じの生活が続いている。

はじめの方は、洩矢様が男を？とか言われていたが、

それもこの一週間で慣れたようだ。順応早いな。
まあこんな感じの生活がまだ続くんだろうな。と期待する俺がいた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「いやー。今日もお疲れ様。」
仕事を終えた俺たちは諏訪子の家に戻っていた。
「神羅が手伝うようになってから本当に楽になったよ。」
こんな会話にも慣れてきた。
能力もほとんど俺のものになってきたからなぁ。
そろそろアレを試してみるか。

諏訪大戦に向けて。

主人公設定（諏訪大戦編）

名前：創理（つくり）　神羅（しんら）

性別：男性

属性：中立・中庸　特性：矛盾・混沌

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

能力値

筋力：Ｂ　魔力：Ｂ＋（霊力、気含む。）

耐久：Ｃ　幸運：Ｃ－

敏捷：Ｂ　宝具：ｎｏｔｈｉｎｇ（無使用）

神様から貰った力

1．「幻想と現実を司る程度の能力」

2．武器

上の１の能力に沿った内容のアイテム。

鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」

どちらもそれぞれの能力に沿っているので、
能力の端末としても使える。未だに使ったことがない。

3．改変・改造能力
何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や
特性を変えることが出来る。

4．世界樹の苗木
その名のとおり、世界樹の苗木、
最近は順調に育つようになった。

5．神様からのオプション
身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等
便利なものをいただいた。

技一覧

鏡面界
あらゆるものを反射する壁を展開する。
発動時には「鏡面界・〇〇展開」又は、「鏡面界・〇〇反転」と発言する。
また、半球や球体で展開した場合、内部か外部のどちらを反射するかを
選ばなければならない。諏訪大戦で使おうと思う。

不老？

諏訪子の家に厄介になって2月は経った。

俺は毎日諏訪子と共に諏訪地方の各地の村を回っている。

そしてその合間の時間で能力の確認と修行を行なっていた。

ひとつ報告するものがあるとすれば、諏訪子のことだ。

そろそろ見習いから正式な神になるらしい。

まあ実際、神に見習い期間が本当にあるかは分からんが。

そして能力のことだが、前から考えていたもの。

防御結界の改良版というより発展、進化の域に近い、反射結界、あらゆるものを反射する、

そういう代物も、完成が近づいてきた。

俺は「鏡面界」と呼んでいる。

後は調整する程度で一応完成するが、まだ試作の域だ。

完璧になったら某一方さんみたいなことは容易いだろう。

まあ他にも考えているものもあるからそっちもやらないといけないんだがな。

俺の能力についてはこの辺までにしよう。
それとこれまた俺のことだが、変わってないと思う。
ん？何がって？俺だよ。
普通なら変わるものが変わってないと思う。
変わってないと思うもの、それは容姿だ。
まだ諏訪に来て２ヶ月程度しか経ってない。が、
少しは変わるだろ少しは。
これはオヤジに聞かないといけない、か？
まあ聞いてみたら分かるか。俺の気のせいかもしれないし。
俺は端末を取り出し、親父に通信する。
「おーい。おっやじさーん。」
俺はめんどくさそうな声で話す。
『なんじゃ、そのポヤーっとした声は？』
おおつながった。
「まあいいじゃないか。なあ一つ聞きたいんだが、俺の体、今どう

なっている？」

『なんじゃ、そのことか。そうじゃのう。まだ詳しいことは言えん。』

「詳しいこと？」

『……まあなんじゃ、おまえ、その、姿が変わらない、と思っておろう？』

「まあそういう気がするってだけなんだが。」

『姿が変わっておらんのは間違いないじゃろう。

じゃがのう、今はまだ時期が時期じゃないと言うかのう。

そのうち、そのうち絶対話すから、それまで待っておってくれんかのう？

ただおまえの言うように、姿が変わっていない、というのは事実と言える。

いま教えられるのはそれくらいじゃ。おまえのいる時代、諏訪大戦の前辺りじゃろう？』

そういうことなら仕方ない。しかし、

「なぜ親父がそれを知っているんだ？」

『ワシはこれでも創造神じゃ。それに、おまえを転生させるとき、

おまえの記憶を見たからのう。

ああ、でも心配するでない。思い出とかはみとらん。知識記憶のところを見たからのう。

これでも他人のプライベートを侵さぬように気を配っておるからのう。』

この親父、どこまでもご都合主義じゃないか。

「まあ後々教えてくれるんならいいんだ。それじゃ時間を取ってすまんかったな。」

『いいんじゃいいんじゃ。言ったじゃろう？ワシは暇なんじゃ、と。』

「そういやそうだったな。わかった。ありがとな。」

『うむ。ではの。』　プツッ

そう、か。しかし変わらないのは正直助かる。

あの腕輪が無くなって不老の状態は解けた。と思っていたが、まだ続いているとは。

これほど好都合なことはないだろう。

ならどうやって切り抜けようか。

八坂神と俺が戦うとアレだしなぁ。

うっかり殺してしまうかもしれん。それは論外だ。

となると俺の標的となるのは……フフフ。

この時の俺は楽しいことを見つけたかのように笑っていた。

しかし諏訪大戦、か。まあその内始まるさ。

仕込み

俺がここにきて2年が経過したらしい。

いま、俺は諏訪子を鍛えている。これは諏訪子が俺に言ってきたことである。

あの親父と会話した数週間後、諏訪子はこの地域を正式に統べる神になった。

そして諏訪子が受ける信仰は見習いの時とは段違いになった。

それに伴い、力も強くなったようだ。

そして、この地域で、土着神の頂点になった。諏訪子の能力の関係上、その象徴は大地。

そういう背景から諏訪子は大地を操る神として周りに認められた。

そして流れで言えば、この辺り土地の神の代表格になった。なったのだが。

立場が逆転したのだ。特にこの地域では諏訪子への信仰が厚くなりすぎ、

ミシャグジへの信仰の厚さを超えたのだ。

だがそれはこの地域、諏訪でだけである。ミシャグジは各地で信仰を得ている。

信仰の総量はミシャグジの方が遥かに上を行くだろう。
だがここ、諏訪での信仰の量は諏訪子の方が上になった。
故に諏訪子は諏訪でならミシャグジを操ることができるようになっていたのだ。
だが諏訪子のミシャグジへの態度はまったく変わらない。
この形が彼女達なりの信頼関係なんだろう。
そして、諏訪子が土着神になってから、半年が過ぎた。
諏訪子は信仰を得るために今まで以上に働いている。
もちろん俺もついて行ってるが。それはいいとして、
この時期に諏訪子が俺に言ってきたことがある。
この辺の神と中央辺りの神の仲は元々良くなかったらしいのだが、
最近更に悪くなっているらしい。
そしてこちら側の代表は諏訪子だ。
向こうはこっちの代表がまだ新参者だから簡単に勝てる、と思っているようだ。
簡単に信仰を奪えると考えているらしい。中央の方は軍神や武神の

類が多かったはずだからな。

まあ簡単に言うと、「あいつら最近調子に乗ってるからこっちの力で痛い目に遭わそう！」

というものである。何といういじめっ子思考。

まあそんな感じでこっちを攻めようという動きがあるらしい。

どうにか和解しようと諏訪子が話し合いをしてはいるようだが。

基本的には、攻めないから信仰寄越せ。とか、無条件降伏しろというようなものらしい。

まあ相手にとって簡単に信仰を得れれば万々歳だろう。

そんなことがこれまでにあったからこそ諏訪子を鍛えている。

俺以外に戦える奴を知らないらしい。

もちろん俺は承諾した。

俺が最初にやったことは武器の作成だ。

戦の神に対して、素手だとすぐに負けるだろう。

だから諏訪子に合う武器をつくることにした。

……

……

……

……

……諏訪子と考えた結果、

「うん。手に合うし、これでいいんじゃない？」

と言って、決めたようだ。

諏訪子が気に入ったものは、鉄製の輪。

諏訪子が地中から鉄鉱石を採ってきて、それを俺が、

鉄鉱石から純度の高い鉄を取り出し、その鉄に諏訪子が神力を込め、

俺が鉄を鍛え、諏訪子がまた神力を込めた。その鉄？を俺が能力で

改良し、変形させ、

諏訪子の手に合うように、調整した特別製だ。

元々大地の産物である鉄に大地を操る神の力を込めた鉄、諏訪鉄と

でも呼ぶか。

その諏訪子に完全に適合する素材で作ったので、

諏訪子には、自分の手足のように扱えるだろう。

そうして武器ができたので、次は戦い方なんだが、

そういや俺全く知らない。

そう俺も経験は少ないのだ。

俺の戦闘経験は人間が月に行く時の１回だけだったはずだ。

それまで俺は能力の修行ばかりしていたはずだ。

結局、諏訪子と俺は修行のほとんどを模擬戦にしつつ、実戦経験を積むことにした。

ちなみに俺の武器は刀、自分の能力で作った刀と、諏訪鉄を使った短刀みたいなものを一つずつ。

俺が作ったものはなんの変哲もないただの刀だ。まあ斬れればいいからこれでいい。

ただ短刀の方は刀と言えないようなものになった。

その刀身は針よりは太いが、極限まで薄く、細くした。暗器のようなものだ。

ここまで細くしても折れないのは、諏訪子の力を込めたからだろう。

まあそういう武器でやっている。

そして形となった俺の戦闘スタイルは、２つ。

一つは速さを生かした高速戦闘型、

もう一つは後手必殺の反撃型。

そして諏訪子の戦い方は近距離と遠距離の両方できる形になった。

遠くに離れたら鉄輪を投げ、近くにくると鉄輪で殴る、みたいな、

シンプルかつトリッキーな戦法になった。それに能力や神力による

攻撃が出来る。

ただ弱点があるんだがな、相手がそれを突いてこないなら勝てるだ

ろう。

俺は今の状態でも神様殺せるらしいし、俺は主に霊力を使うだろう

からな。

人間だからと油断している奴から潰すことにする。

そう思っているとき、俺に新たな疑問が生まれた。

諏訪大戦って勝っちまったらどうなるんだ？

俺はそう思ったのだ。

――――――――――――――――――――――――

諏訪子と修行を始めて一ヶ月が経ったある日、最近は諏訪子が中央の方に頻繁に行っている。

俺は気になったので諏訪子に聞いてみた。

「なあ諏訪子。中央の神たちと戦うのか？」

そう聞くと諏訪子の体が　ビクンッ、と跳ねた。あまりよくない状況のようだ。

諏訪子は自信がなさそうな声で言う。

「う、うん。多分そうなると思うよ…………。」

その言葉に俺は、

「そうか。」

と一言。すると諏訪子は、

「神羅。神羅は怖くないの？神様と戦うの。」

諏訪子はそう言うが、

「別に？諏訪子は怖いのか？勝てばいいだけだろう？」

俺は気にしてないかのように言う。諏訪子は、

「怖いに決まっているよ。本当に勝てると思ってるの？」

不安そうにそう言う。それに対して俺は、

「俺は勝てると思うぞ。まあ相手の力量は知らないが。」

俺はまた気にしてないかのように言う、いや気にしていない。

「どれだけ戦力に差があると思ってるの？それで勝てると思うって、神羅は戦う気なの？」

諏訪子は変なことを言うなあ。

「当たり前だろ？なんのために俺がいると思ってるんだ。」

俺は自信満々で言う。だが諏訪子は少し考えるようにして、

「……神羅は、戦わなくて、いいよ。」

諏訪子は今信じられないことを言った。

「なぜそんなことを言う。俺は足でまといか？」

俺はそう言う。

「いいや、神羅が居れば心強いよ。でも、でも神羅は人間じゃないか。これは神の戦い、

神羅は死んじゃうかもしれないんだよ。そうなったら私は……」

俺はそこで遮るように言う。

「大丈夫さ。俺はこんなところでは死なない。」

そう言って諏訪子の頭を撫でる。

「……ぁ。……で、でもそんなの分からないじゃないか！」

諏訪子はまだ俺が戦うことに反対するようだ。

仕方ない。俺はそれに逆らうように言う。

「諏訪子。俺はお前がどう言おうと戦う。もう決めたことだ。」

諏訪子は、でも。とまだ認めない気だ。

「じゃあ俺は絶対に死なない。それだけは約束する。」

すると諏訪子は、

「絶対に？絶対に死んだりしない？」

と言う。俺は、ああ。と返す。そういうと諏訪子は、

「……分かったよ。でも、神羅は後ろの方にいて。危なくなったらすぐ逃げて。」

と言う。それに対し俺は、

「…ああ。分かった。」

と言い、

「じゃあ諏訪子、相手のことを教えてくれるか？」

と続ける。

「分かったよ。相手はね、建御名方神を筆頭に血の気の多い軍神や武神たちなんだ。

でも、八坂神とかの一部はあまり乗り気じゃないみたい。

八坂神は建御名方神の妻ってことになっているから来るだろうけど、殆どの神は戦いの神だから、被害も凄いことになるだろうね。」

ふむ。そうか。そして俺は聞く。

「諏訪子。あとどのくらいで戦うことになりそうなんだ？」

そうすると諏訪子は言いにくそうな表情で、

「あ、あはははは、ごめん。一週間後なんだ。」

といった。俺は、

「諏訪子。俺はもう寝る。」

と言った。

「神羅。急にどうしたの？」

「少し眠くなってな。諏訪子。建御名方神と八坂神の特徴を教えてくれ。」

「？いいけど。どうするの？」

「いや、知っておいたほうがいいと思ってな。」

そして俺は二柱の神のことを聞き、

「それじゃあ諏訪子。おやすみ。」

と言い。

「うん。おやすみー。」

という諏訪子の声を背に、部屋から出た。

ふう、息を吐き出す。俺は今自分の部屋でなく、神社の境内前の階段を降りている。

そして俺は階段の下のところに白い蛇、ミシャグジがいるのに気がついた。

「ミシャグジさん、か。諏訪子を頼むな。」

俺はそれだけを言う。そして俺は中央の神たちの方へ向かう。

軍神たちは大和地方に集まっているようだ。だから俺は西へ飛ぶ。

この戦いの仕込みをするために。

俺は大和地方に来ていた。俺がここにきている理由は交渉するためである。

交渉したい相手は八坂神、つまり八坂　神奈子である。

そう思い、いろんな神社を回っている。

少し里に降り休憩をしようと思って、
とある村に降りる。俺がそこで見たものは、
濃い紫の髪で、鏡を首から下げている。
諏訪湖が言っていた姿と合うような女性がいた。
酒が入っているであろう樽に囲まれて、

「なんれわらしがいかなひゃならはいおひょ〜。」

と言っている。
かなり酒臭く、酔っているようだ。周りの人は引き気味だ。
仕方ないから、近くの川に連れていった。
いつまでもあそこにいると周りに迷惑だろうからな。
俺は背中の八坂神をそのまま川へぶん投げた。
すると綺麗な放物線を描き、八坂神は川へ頭からＩＮ。
その数秒後、
「ブクブクブクブク……ぷはぁっ。だ、誰だぁ！私を川に投げたのは！」

どうやら酔いは冷めたようだ。

「あんたかい？私を投げたのは。人間のくせに…あんた人間かい？見ない顔だね。」

「人間だよ。そして俺がお前を投げた。」

「あんた、命知らずのようだねぇ。私を投げるなんて。人間のくせに私にこんなこｔ「まて、八坂神」

なんで私の名前を知っているんだい？」

「まあ聞け。八坂神。お前に用がある。ただお前が酔っていたから川に投げただけだ。

これは当然の処置だ。俺は悪くない。」

「何か納得できないねぇ。まあこのことはお互い様として不問にしよう、で、用って何なんだい？」

「ああ。諏訪の方の神との戦いについてなんだが――――。」

そこまで俺が言った時八坂神の威圧感が膨れ上がった。

「なぜ人間がそのことを知っている！人間、お前は何者だ！」

おお。これが威圧感か。

「なあに。普通じゃない人間だよ。それに、俺はただ交渉をしにき

ただけだ。」

そう言うと威圧感が消える。

「交渉だって？」

「ああ。交渉だ。交渉しようじゃないか八坂神。」

「……話くらいは聞いてやる。」

八坂神は信用してないような声で言った。

「まずは俺のことを話そう。俺は創理　神羅。

あんた達の敵、諏訪地方の洩矢神のところで厄介になっているものだ。

今回は戦を行うにあたっての交渉をしにきた。」

俺は自分の要件を伝える。すると八坂神は驚いた表情で言った。

「ちょっと待ちな。あんた、戦を止める気がないのかい？」

その質問に対し俺は即答する。

「ない。だからこそここに来た。」

「それで何故私のところなんだい？」

「ああ。諏訪子。洩矢神からあんたは乗り気じゃなさそうって聞い

たからな。
攻めようとしてる奴より話がしやすいと思ってな。」
ここで八坂神は少し考えて言った。
「……一応そちらの要求を聞こうじゃないか。」
よし。
「それは助かる。それじゃあ言おう。こちらが、俺が出す要求はただひとつ――――――。
――――――諏訪子と、洩矢神と一対一で戦って欲しい。」
俺はただそれだけ言った。八坂神の反応は、
「はあ？」
というなんとも気の抜けたものだった。
「ん？聞こえなかったか？じゃあもう一度言うｚ「それだけかい？」
ああ。」
「それでいいのかい？洩矢神は戦好きじゃないんだろう？」
「ああ、それで構わない。諏訪子も出来るだけ戦いたくないだろうしな。」

「それじゃ尚更ダメじゃないのかい？それに私の他の神のことはどうするのさ。」

「そいつらは俺が潰す。」

そう言うと八坂神は、

「ただの人間がそんなことできるのかい？」

といった。それに対し俺はニヤリと笑い、

「ああ。任せておけ。」

と言った。八坂神は、

「そこまで言うなら任せるけど、私には洩矢神と一対一で戦う理由がないよ。」

「そこはまあ、諏訪の刺客から攻撃を受けた。とでも言え。証拠用にこれを渡しておく。」

と言って俺は諏訪鉄で出来た短刀を差し出す。

「これは……洩矢神の神力かい？まあこれならどうにかなるだろうね。」

「それを使ってもらって構わない。それに俺は一対一の戦いの邪魔はしない。

受けてくれるなら俺はこのまま帰らせてもらうが、どうする？」

俺が言うと八坂神は、

「受けてやろうじゃないか。その要求。」

と返答した。そして俺は礼をし、諏訪へ向かった。

その際に八坂神は俺に、

「じゃあ、神羅。また会おうじゃないか。それと私の名は八坂　神奈子だよ。」

と言われた。

諏訪大戦まで、あと5日。

その頃諏訪子は、

「あーうー。今日も神羅、帰ってこなかったな……。」

と呟くのであった。

諏訪大戦まで後3日、俺は神奈子のところから、二日かけて帰ってきた。

もう人間の避難は終えている。

決戦までもうすぐ、と言うことで、各地から神様たちが集まっている。もちろんミシャグジもいる。

俺はそこに帰ってきた。

「諏訪子ー。ただいまー。」

と言って部屋の扉を開けた瞬間、

「しーんーらーっ！」

と言いつつ諏訪子が体当たりしてきた。

「神羅。神羅っ。神羅ぁ。今までどこ行ってたのさ。心配したんだから。」

と諏訪子が言う。どうやら心配していたようだ。俺は、
「悪かったな。ちょっと用事があったから遠くに行ってたんだ。」
と言いつつ諏訪子の頭をなでる。諏訪子は気持ちよさそうに細め、
「でも帰ってきてくれて本当に良かったよ。」
と言う。安心してるようだ。
そして迎える決戦の日、
諏訪大戦　開戦――――――――――――。

――――――――――――――――――――――――――

当日、俺と諏訪子は会話していた。
「どうやら始まるようだな。」
「うん。結局こうなっちゃった。けど、神羅は下がってて。」
「ああ。」

俺は言われたとおり後ろの方へ下がる。

そろそろか。

向こうの方から何かの大群がこちらへ向かってきている。

その数は俺たちの3、4倍はあるほどだ。

大群がある程度のところで止まり、誰かが前に出た。

それに合わせ諏訪子も前に出る。

相手は神奈子だろう。諏訪子は驚いている。

二人は会話というか舌戦だな、それをしつつ戦闘態勢に入っていた。

俺もそろそろ、と思い。こっそり前に移動する。

俺もそこで戦闘準備をする。神奈子が諏訪湖に何か放り投げた。

それを受け取った諏訪子の表情は驚愕と何か謎が解けたようだった。

そして二人の力が膨れ上がり、互いに攻撃を放った。

それが開戦の合図なのか、両軍は一斉にぶつかり合う。

状況はこっちが圧倒的不利だ。諏訪子は神奈子の相手で精一杯だろう。

そのことも考えつつ俺は、

そろそろかと思いつつ、発動する。

相手の神を潰すために。

――――《鏡面界》、発動。――――

その瞬間、相手の方を何かが包む。さあ、

祭りはまだまだ始まったばかりだ――――――――――。

敗北

「はぁ、結局こうなっちゃったよ。」

神羅を後ろにさげた私は、こうなったことに後悔していた。

向こうから来ているのは相手だろう。それを建御名方神が率いているはずだ。

その大群の数は私たちの三倍以上だ。その大群は私たちの前に止まり、代表が前に出てきた。

出てきたのは建御名方神…？じゃない？あの神は……、や、八坂神！？なんで！？

「やあ洩矢の。元気そうじゃないかい。」

なんで八坂神が？八坂神は戦うのに乗り気じゃなかったはず。

「な、なんで八坂神がここに？」

「分からないのかい？まあ自分の下の管理もできない奴に言っても意味ないだろうねぇ。ほらっ。」

八坂神は何かの包みを投げてきた。それを見ると……。こ、これは！

それは私の神力の込められた短刀のようなものだった。

こ、これ、神羅の作った武器じゃん。でもなんで八坂神が？

「それは5日くらい前に私の方に飛んできたものだよ。私の心臓めがけてね。

でもそれを投げた奴は、失敗したことに気づいたのか直ぐに去っていったよ。」

5日前。ちょうど神羅がいなかったときだ。神羅は相手の戦力を削ぎに行ってたのかな？

「それには洩矢の、あんたの神力が込められていたからねぇ。

こんなもの持ってるのはあんたのとこの奴位しかいないからねぇ。

ま、こんなことされたら私も怒るよ。だから今回は私があんたと戦う。

安心しな。私の他の神はあんたに危害は加えない。あんたと私での一騎打ちだ。」

これは最も簡単で危険な賭けだろう。でも総力戦は確実に負けるなら、と思い私は構える。

「おっと、ようやくやる気になったようだね。そうこなくっちゃ。」

八坂神も構える。やるしかないようだ。私と八坂神は神力を練る。

私は鉄輪を、八坂神は大きな柱を、双方が同時に放った。

それと共に両方の軍勢が動き始めた。

状況はとても悪い。相手の軍によって私たちは敗戦必死だ。

私は八坂神一人だけでいっぱいいっぱいだ。

そんな圧倒的不利な状況の中、ひとりの声が戦場に響いた

――――――《鏡面界》、発動。――――――

その言葉と共に何かに相手の軍勢が包まれる。

声の方向を向くとそこには、自分が後ろにさがらせたはずの、神羅が立っていた。

――――――――――――――――――――――――――

さて、こっちの戦力はあと僅か。

しかし諏訪子と神奈子の戦いが長引けば長引くほどこっちには好都合だ。

今使った鏡面界の設定は両面展開。それを相手を囲むように張っている。

中の奴らは少し戸惑ったりしたが、すぐに持っている武器で叩き始める。

だがどうにもならない。なかにいる奴らは次第に疲れ、肩で呼吸しているものもいる。

もうすこし追い詰めるか。そう思い俺は唱える。

《鏡面界：内部反転・球形展開》

俺の手の中にサッカーボール程度の大きさの球が現れる。

俺はそれに向かって霊力弾を放つ。そしてそれに向かって連続で霊力弾を放つ。

すると中の霊力弾はどんどん細かく分かれる。俺はそれを繰り返す。

そして俺は改変する。霊力を強く。そして硬く。

俺はそれを相手に向かって投げる。そして能力を解く。

すると球の中の無数の霊力弾は周りを傷つけようと飛ぶ。

その霊力弾でたくさんの神を傷つける。ただし殺せない。

だがそれが狙いなのだ。無数の弾は例外なく神々の体力を奪う。それが本来の目的なのだ。

疲労のたまっている神はこの攻撃により、更に披露が溜まる。

神力は沢山あっても、どれだけ力が強くても、疲労が溜まれば必然的に動きは遅くなる。

そう、神羅はこの時を待っていた。神羅の戦闘スタイルの一つは高速戦闘。

だから回りくどいこの方法を選んだ。

仲間が少なくなり、なおかつ相手の動きが鈍い、自分の動きやすい状況を作ることを選んだ。

この方法は相手の体だけでなく、心にもダメージを与えれる。

動けない自分に近づく敵、まさに死が自分に近づく感じだろう。

そして俺は好機とばかりに駆け出す。自分の刀を持って。

そして一瞬のうちに背後に周り、相手の胴を水平に斬る。

その次の奴は首、その次のは心臓、そのまた次は肩からの斬り下ろし。

次々に神の肉体を斬る。次々に生命力を奪う。

神の大群をただの刀で切り伏せる。何千、何万と斬る。

そして俺は最後のスパートをかけるように言葉を紡ぐ。

《我の体は光のごとく、何よりも早く。我の体は神にも見えぬ。》

そう唱えた後は誰にも見えなかったであろう。

気がついたときには斬られていた。そう感じるだろう。

この時、ここにいた全ての神々が、一人に、ひとつの存在に敗北した。

それと共に終わる。この戦いは終わる。諏訪子の負けという結果で。

そう、

諏訪子の負けという結末で。

（終わったか。）

戦後処理

さて。諏訪大戦が終わった次の日、俺は諏訪子と神奈子の前で正座していた。

「どういうことか、色々説明してくれるよねっ。」

諏訪子はニッコリと笑いながら言う。だが目が笑っていない。

諏訪子の隣にいる神奈子はカタカタと震え、目を逸らしている。

こんなことになったのは昨日のことが原因である。

諏訪大戦終戦直後。俺は諏訪子と神奈子のところへ行った。

「し、神羅ぁ。ごめんっ。本当にごめんね。負けちゃったよぅ。」

諏訪子は本当に申し訳なさそうに言う。だが俺の返答は、

「ああ。別にいい。諏訪子が絶対負けると思ってた。１００％負け

ると、戦う前から分かってた。」

こういうものだった。ここから次のような会話が続く。

「え・・・。でも、神羅は勝てると思うって言ってたじゃん。」

「ああ。言ったな。「俺。」は勝てると思うって。現に俺は勝ったぞ？」

「えええぇぇぇぇ！じゃ、じゃあ神羅は負けると分かっていて私を戦わせたの？」

「そういうことになる。」

「じゃあ神羅は何が目的だったの？」

「俺の目的か？一応神を殺すことだが？」

「なんのために？」

「この刀に神様の血を吸わせるためだ。」

「そのただの刀？そうしてどうしたいの？そんな刀じゃ神様は死なないでしょ。」

「ああ。だからこの刀なんだ。神を斬り、その血を吸うことでこの刀はを殺せるほどになった。」

話が脱線していると。

「ちょっと。話がずれてるよ。洩矢の、あんたは神羅に何が聞きたいんだい？」

「おっとっと、そうだったね。ってなんであなたが神羅を名前で呼んでるの？

襲われたんじゃなかったの？」

「うーん。まあそこから話してあげようじゃないか。あの話は嘘だよ。

私は襲われて何かないし、あんたと戦ったのも神羅に言われたからだしね。

大体、沢山の神を殺せる程の実力の神羅が私如きを仕留め損なうことなんてありえないよ。」

「じゃああの包みは？」

「あの変に細い短刀かい？あれは神羅から直接受け取ったものだよ。その時に交渉したのさ。

洩矢神と一対一で戦えって。何体の神を相手どるより、一体の方が楽だし楽しいからねぇ。

私はすぐ承諾したよ。……それにしても、神羅には敵いそうにないねぇ。」

「なんでそう思うのさ？」

「なんでって、交渉の時だって、あの短刀、あれはあんたと戦う理由作りのためのものと考えて、
戦前のあんたへの態度、戦時のあの膜、攻撃、そしてその刀まで、
全部神羅の手のひらの上で踊っていたこのようなこの展開。
おおかた神羅は、戦の後についても予想がついていたと思うよ？」
「戦の後って、神羅。いまのって本当なの？」
諏訪子は聞いてくるが、神奈子が、
「それはあとで聞くといい。それよりみんなが起き始めるよ。」
その言葉の後に続くように周りの神達が起き始める。
そしてその後、戦後対談があったのだが、神奈子を残し、残りの神は帰っていった。
信仰が根強く、全然受けられないからだそうだ。
神奈子が帰らないのは、向こうがつまらないからだそうだ。
それに、諏訪子に唯一勝ったから。敗者は勝者の言うことを聞くのが普通。
と言いながらここに留まっている。
そういうことがあり、長い一日が終わった。

ということで話は冒頭に戻る。

諏訪子と神奈子は互いに名前で呼び合うようになった。

朝起きると、目の前に諏訪子がいた。そしてすぐに神奈子のいる部屋まで引きずられ、今に至る。

諏訪子の目はマジだ。言わないといけないだろう。

とりあえず今一番言わなければならないことは一つ。正座の体勢から頭を下げ一言。

「すいませんでした。」

そう謝った。そして俺の仕込みの全てを話した。

説明し終わってから神奈子から質問があった。

「ねえ神羅。あんた。私たちが諏訪子から信仰を奪えないこと、分かっていたね？」

それに対する俺の返答はもちろん

「ああ。そこまで想定内だ。」

すると神奈子は俺の想像を超える行動をした。

「そうかい。でもこれは想定外だろう？」

神奈子はそう言い、俺に――――――――――――――――――――。

――――――――キスをした。

その時空気が凍った。そして俺は神奈子に聞く。

「神奈子。おまえ、何で……。」

「分からないのかい？私はあんたの、神羅のことが好きになったんだよ。

自分より強い者に惚れることのなにが悪いんだい？」

「いや、でもおまえ、夫がいるんじゃなかったのか？」

「夫？……あのジジイのことかい？あれは形だけのものだよ。

誰が好き好んでジジイの妻になるんだい？

神羅は私より強い。おまけに顔も悪くない、むしろいいほうじゃな

いか。

惚れる要素としては十分だと思うけど？」

「いやでも俺なんかでいいのか？」

「ああ、面倒だね。」

神奈子はそういい、また俺の口を自分の口で塞ぐ。

「私は神羅のことが好き。それだけの簡単なことじゃないか。

逆に聞くけど神羅は私のこと嫌いなのかい？」

「いや、むしろ嬉しい。そして多分俺は神奈子のことが好きなんだろう。」

俺は神奈子から告白され、その返事を述べていると。

俺の横から、「だめー！」という声と共に何かがぶつかってきた。

「いくら神奈子でもだめっ！神羅は私のものなんだから。神奈子には渡さないからね。」

いつからそういうことになった。

「ふーん？諏訪子のもの、ね。」

神奈子は面白いことを思いついたような表情だ。

「ねえ諏訪子。神羅があんたのものって言うなら、私にくれないかい？もちろん断らないよね？」

大戦後の立場を利用する気らしい。こうなると諏訪子は断れないので、

「わー！わー！今さっきの無し。私は何も言ってない。」

と言い、無かったことにした。

「じゃあ問題ないじゃないか。」

そう神奈子が言う。立場も口も神奈子の方が上手みたいだ。それに対し諏訪子は、

「だめだめだめぇ。神羅は私のものなのぉ。」

諏訪子がその姿に合うくらいの子供みたいになった。神奈子は面倒そうに、

「じゃあ聞くけど諏訪子。あんたは神羅のこと、どう思ってんだい。」

そう聞く。諏訪子は、顔を真っ赤にして、

「ど、どう思ってるって、そりゃ、あれだよ？わ、私も、ね？」

言いにくそうにしている。ここまでだと流石に俺も分かる。すると神奈子は、

「はっきり言いなよ諏訪子、好きなの？そうじゃないの？」
神奈子がそう言うと、諏訪子は顔から湯気を出しつつ
「わ、私も…、私も神羅のことが好きっ！神羅のことが大好きっ！」
諏訪子は大きい声ではっきり言った。そして神奈子は、
「さて神羅。諏訪子のことはどうするんだい？」
そう言われ、俺は諏訪子にキスをして、抱きしめた。そして、
「俺も諏訪子が好きだ。愛してる。」
そう言う。すると諏訪子の瞳から涙が零れる。そして神奈子が、
「さて、神羅。あんたは今、二人の女性に告白したんだ。
そうしたってことは。どちらも愛して、幸せにしてくれるんだろう？」
と言った。望むところだ。
「ああ。分かっている。」
俺はそう言い、二人を抱きしめた。その時に神奈子と諏訪子が、、
「でも、私たちが惚れたんだ、なんかこれから色んな奴が好きになりそうだねぇ。」

「あ、それ、なんかありそうだね。まあ、だからこそ私は好きになっちゃったんだけど。」

「違いないねぇ。…もしそうなったら迷わなくていいよ。神羅の好きに愛するがいいさ。

ただし！私達も同じように愛して、幸せにしてやりな。諏訪子もそれでいいね？」

「うん！全然いいよ！神羅なら何人愛しても、絶対に全員を幸せにしてくれると思うから。」

「神羅、責任重大だねぇ。ま、頑張りなよ？」

という二人の心の広さを感じた。

そしてその夜二人を抱き、3人同じところに寝た。

次の朝は腰が少し痛かったが。

進化&神化

諏訪大戦が終わり、神奈子もこちらの生活に慣れてきた。

大戦後、諏訪で信仰が得れない神奈子は、諏訪子の上の地位に納まることで、

信仰を、諏訪子経由で受ける方法をとるようだ。

俺は二人の告白を受けたあと。二人を抱いた。

二人とも処女で、顔を赤く染めて、とても可愛かった。

それからも、何度か抱いた。朝目が覚めたとき、俺のモノが舐められていたこともあった。

さて、話を戻すが、神奈子は今信仰を受けるために動いている。

神奈子の能力は「乾を創造する程度の能力」だ。

乾とは簡単に言うと空のことで、天候を操ったりもできる。

みんなが、晴れたり、雨が降ったりするのは神奈子のおかげ、と認識するようになれば、
かなりの信仰が得られるはずだ。
そう考えていると外の方から、ただいま帰ったよ～。と言う言葉が聞こえる。
俺は迎えに行くと、神奈子の他に諏訪子もいた。
「やあ神羅。ただいま。」
「おかえり、神奈子。お疲れ様。」
俺はそう言って神奈子に軽くキスをする。すると諏訪子が、
「神羅神羅っ。私にもっ。」
というので諏訪子にもキスをする。もうこれが俺らの日常になっていた。

ところ変わって、居住スペースの居間。俺たちは夕飯の時間だ。
ちなみに俺たちの食事はいつも、村からのお供え物を神社の巫女さんが調理したものが出る。

そして談笑しながらご飯を食べている俺たちのところに、それは急に現れた。

俺たちが食事をしている部屋の、俺の隣の空間に、空間に穴があいたのだ。

俺たちは驚き、その穴から距離をとる。その中から何か出てきた。

俺は出てきたものの正体が分かった。俺はそれを見た途端、力いっぱいそれを蹴る。

だかしかし、俺の足は空を切り、俺が狙ったものは、フォォォォン、という音と共に俺の背後へ。

まるで北斗の拳の無想転生のように俺の背後へ移動した。

神奈子と諏訪子は今の出来事に驚いている。無理もない。目の前にいる、俺の攻撃を避けた奴の姿は、

杖を持ち、少し浮いている老人なのだから。そしてその老人は口を開く。

「そこの巫女さんや。ワシの分のご飯も用意してくれんかの？」

この老人の出てきて最初の言葉はこれだった。

全く、こいつはどこまで勝手なんだか。

――――――――――――――――

俺たちは、夕飯を食べている。いまさっき空間に穴を開けてやって来た人物も共に。

「で、なんでここに来たんだ？」

「ふむ。まあそのことは夕飯の後でもいいじゃろう。」

今俺が会話した人物は親父。空間に穴を開けてやって来た人物である。まあ神様だが。

俺と親父が話していると諏訪子が俺に聞いてくる。

「ねえ神羅。この人って誰？ずいぶん親しいように見えるけど。」

神奈子も頷いている。そういや話してなかったな、親父も自己紹介してないし。

「この老人は俺を生み出した奴で、俺は親父って呼んでる。一応神様だ。」

俺は簡単に説明する。諏訪子と神奈子は信じられないような表情をしている。

「え？ほんとに神様？でも神力を感じないよ？」
諏訪子は言う。神力って諏訪子や神奈子みたいな神様にある力、人間でいう霊力みたいなものだろ？
「なあ親父。諏訪子が言ったこと、ほんとなのか？」
俺は黙々と口の中に白米を掻き込んでいる親父に聞いてみる。
「ん？神力のことか？ちょっと封じておるからのう。ちょうどいいじゃろう。
ワシの自己紹介と共にちょっとだけ解放してみるかのう。」
そう言い親父は続けた。
「ワシは神羅を生み出した神で、こいつには親父と呼ばれておる。お前らも好きに呼ぶが良い。
ちなみに神格は創造神じゃ。よろしくのう。」
そう親父が言ったとたん、親父を中心に風が吹く。その風の強さに、親父の周りの物が、
俺たち諸共壁まで飛び、ぶつかる。諏訪子たちは、あうっ、やぐっ…。と言っている。
少しすると風が止んだ。今さっきの感じが親父の神力なんだろう。

「やはりこうなりおったか。みんなすまんのう。かなり抑えたのじゃが……。」

親父はそう言う。これで抑えたって、いったいどれだけ強いんだ…？

「親父。何してんだよ。部屋の中をこんなにして。」

「すまんのう。あれでも１％にも満たないんじゃが。」

そう言って親父は手のひらを前に出す。すると飛ばされたものや壊れたものがもとどうりになった。

「さて、神羅。話があるから向こうの部屋に来てくれんかのう。もちろん後ででもよい。

…そうじゃのう。あの二人を連れてきても良いぞ。なるべく早くのう。」

そういって親父は居間を出ていった。よし。諏訪子と神奈子も連れていくか。

俺は二人を連れて、親父のいる部屋の前に来ていた。

「親父、入るぞ。」

そう言い俺は扉をガラッと開け、中に入った。親父は部屋の真ん中

に座っている。

「おお、来たか。まあそこに座るといい。」

そう言われるままに俺たちは座る。親父はそのことを確認すると口を動かした。

「さて。今から神羅に言わなくてはならんことがある。

前に通信で話しておったことじゃ。質問は後で聞くからまずはわしの話を聞いてくれ。」

親父はそう言い続ける。

「まず一つ目じゃ。今日をもって神羅は神になる。神格は神羅の能力の関係上、幻想神じゃ。」

俺が神に？なぜだ？そう疑問に思っていると、親父は続けた。

「そして二つ目じゃ。一つ目の関係上、神羅は永久不変の限定的な不滅になったのじゃ。」

ちょとまてぇぇぇぇぇ！！！！どうしてそうなった！

「最後に三つ目。また一つ目の関係上、神羅の能力が増えたのじゃ。

さて。ここで何か質問はないかのう？」

親父は今大変なことを言いやがった。後ろの二人も困惑しているだろう。

「親父。全部詳しく聞かせろ。わかりやすく。」

俺はそう質問した。

「分からんかのう。まあそう言うなら最初から説明してやろうかのう。

まず一つ目じゃが、お前はそこの神と共に多くの村へ行って、土地を豊かにしておったじゃろう？

そのことで人間から信仰を受けたのじゃ。後はお前の能力上、当然のことじゃ。」

まあそれはだいたい理解できるので何も言わん。

「次に二つ目じゃが、お前の能力が原因じゃ。」

親父は何を言っているんだ？俺の能力が原因？

「……その顔じゃ忘れとるようじゃのう。まあ説明してやるわい。

お前の能力、「幻想と現実を司る程度の能力」は前にも言ったように、

お前の存在自体に刻んである。そのことによってお前は幻想であり現実である。

と言う、特殊な存在になっておる。これがどういうことかというと、

お前は幻想、まあ夢や幻、思考もかのう。まあそういった形のないものでありつつ、

現実にいる、つまり形あるものとして捉えられる。すると形の無いもの、例えば想像、

そんなものを生物が信仰すること＝お前への信仰になる。

形のあるものに対しても同じようなことが言える。

特に人間は何かに縋らないと生きて行けんからのう。そして信仰がある限りお前は存在し続ける。

故の不滅じゃ。まあ消える方法はあるがの。」

それじゃ俺は人間や知的生物がいる限り生きつづけるということか。

「では三つ目じゃ。神羅が神になるということで、基礎的能力とワシからのお祝いを含めて

便利な能力が増えることになった。」

「能力…だと？」

「そうじゃ。うーむ、基本的な物から言うとじゃな、まずは身体能力の底上げかのう。

そしてお前の能力の出力の制限を解除する。まあ使えば使うほど上限は増えるがのう。

次に便利なものじゃ。これは少し強いと思うがのう。言霊と言う奴じゃ。

神の言葉、神言とでも名付けるかのう。これは様々な現象を言葉で起こせるものじゃ。

お前も大戦の時に似たようなことをやっておったじゃろ？

あんな感じで使うと良い。ただし応用も忘れんようにな。色々組み合わせてみると良い。

その次じゃが眼じゃ。物の解析や透視も可能な万能な眼じゃの。

普通は能力に準じたものなんじゃがお前は能力が能力じゃからの。

まあ神眼という奴じゃ。後ろの二人も持っておるしのう。

あと最後に、お前に与えた武器、お前は全然使ってないようじゃがのう。

あの二つの隠された機能を開放しとくぞ。まあ何かは伝えん。

一回くらいは使ってみろ。それまでのおたのしみじゃ。

……このくらいかの？長く喋りすぎたわい。」

親父からの長い説明が終わった。本当に長かった。

話を要約すると、俺はバグレベルからマジチートのご都合主義になったようだ。

パワーアップは正直嬉しいことなので、黙っておこう。

「もういいかの？ワシは説明し終わったから帰るが、何かあったらすぐに連絡を寄越すんじゃぞ。」

親父はそう言って、目の前の空間を捻じ曲げ、穴を開ける。こうやってたのか。

特に用事がないので、俺は親父を見送る。

そして親父は、ではの。と言い。帰っていった。

そして残された俺たちはその後。村の皆と共に、俺の就神？を祝い宴会で朝まで騒いだ。

その次の日、俺たちと、村の人間のほとんどが一日動けず寝込んだことだけは言っておこう。

洞窟

俺が神格を得てから、数十年が経った。あの時使えるようになった能力はとても便利だった。

そして俺が貰った武器だが、鍵型の物と本型の物で今まで使うどころか、忘れていた、

どうでもいい品だったが、少し事情が変わった。

まずその武器の形や大きさを教えておこう。

鍵型の物は２ｍ近くの大きさで、近接武器としては使いにくそうだ。

次に本だが、こちらはまるで魔術師が持っていそうな大きさの本だった。

その本の表紙には大きい鍵穴があって、さっきの鍵でピッタリくらいだ。

俺はまさかと思いつつその穴に鍵を差し込んだ。すると本の方から「認識完了」と声がした。

そしてその本と鍵を中心に、なんか魔方陣の様なものが展開されていく。

そのとき、俺の頭に、何かの膨大な情報が流れ込んできた。
俺はあまりの情報量に頭を抑え倒れそうになる。するとその情報の波は止まった。
「なんだ？……今のは。」
俺はそう思いながら、その魔法陣に触れる。するとまた情報の波が押し寄せる。
俺はすぐさま手を離し、
「まただ。また何かが流れ込んできた。」
これは耐え切らないといけないのか？そう思った俺は、その魔法陣の中に突っ込んだ。
中に入った瞬間、また何かの情報が流れ込んでくる。頭に激痛が走る。
「グゥッ……。」
そして俺は魔法陣の中心にある鍵に触れた。その時。
＜管理者認証完了。通常モードに移行します。＞
と言う音声が流れ、魔方陣が治まった。
「通常モード？ん？なんだこれ？」

俺は意味が分からず。宙に浮かぶ、モニターのようなものに目を移す。そこには、

『　神羅へ

これを見ておるということは、ちゃんと起動したんじゃろう。

今からこれの説明を行うから、ちゃんと読むように。

いまお前が持っている武器二つ。あれは幻想と現実、それぞれの塊じゃ。

その二つを組み合わせることで幻想と現実、両方の全てを知ることが出来るじゃろう。

簡単に言うと星の記憶とか森羅万象の類、アカシックレコードというやつじゃ。

それからはいろんな情報が得られるから、自分の好きなように活用するとよい。

創造神

より　　』

と言うメッセージが残されていた。そういうことかよ。

その内容を理解すると俺は、二つの武器をしまう。確かにこれは便利だろう。

そう思い、暇つぶしに歩いていると、俺の後ろから誰かが走ってく

る。その誰かとは、

「お父様〜〜〜！遊んでくださ〜〜い！」

そう、この俺を父と呼ぶのは俺の娘だ。

諏訪子との間に出来た子で、名前は風歌（ふうか）。今年で八歳になる。頭のいい子だ。

まあ俺と諏訪子の間という特殊な環境に生まれたので少し心配だったが、大丈夫そうだ。

俺は普段力を抑えているので、種族的には人間と変わらない。そのためこの子は、

人間と神の子、半神半人ということらしい。今のところ順調に成長している。

まあ普通の人間よりは長生きするだろう。少しだけ神力を持っているからな。

まあこんな具合で今は生活をしている。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

それから数年――――。

風歌も十数歳になった頃、俺はとある洞窟に来ていた。

この洞窟の周りは草が以上に成長し、まるで洞窟を守るかのようにその入口を囲んでいる。

そう、俺にとって始まりの洞窟だ。

俺が何故ここに来たかというと、気になったからである。

この植物たちの成長速度はまた上がった気がする。

そして自分の眼でこの辺りを解析してみると、何かの穴、

しかもここじゃないところにつながっていそうな真っ黒な穴、いや、何かの入口のようなものだった。

俺はなぜそんなものがあるのか。そう思い調査に来たのだ。

俺は洞窟の前に空から降りる。そして洞窟内に入る。

しばらく進むと、少し広いところに出た。ここは俺が拠点としていたところだ。

そこから周りに解析をかけてみる。

……

……ん？なんだ？

すると俺は何かに気付く。そこは、岩があり、他には何もない場所だった。

俺はそこに行き、岩を砕いた。するとそこには人が四つん這いで通れるくらいの穴があった。

「何かが、漏れている？」

俺はそう呟く。そうこの穴からは何かの粒子が漏れている。そして俺はその粒子に解析をかける。

その結果、

「魔力？それもかなり濃いぞ。」

そう、魔力だった。なぜこんなところに魔力が？

「ここは入ると長い時間がかかりそうだな……。」

ここには何かある。そう確信のようなものを感じた。

ここに入る前に、神奈子と諏訪子にも話さないといかんな。

そう思い、この日は家に帰った。

あの後諏訪子達に話した。その時の返答は条件付きでＯＫだそうだ。
その条件とは、せめてあと１年位ここに居ろというものだった。
俺はすぐさまそれを承諾。その後１年間諏訪に留まった。

――――――そして旅立ちの日。

「ねえ神羅。本当に行くの？」
諏訪子が悲しそうな目で言う。それに対し神奈子は
「諏訪子。１年留まれって条件だったじゃない。こういう時は素直に見送るもんだよ。」
と諏訪子に言う。
「諏訪子も神奈子もすまんな。」
「いいんだよ。私たちはまた会えるだろう？生きていれば。それは

風歌に言うべきじゃないか。」

「それもそうだ。風歌。すまんな。面倒見れなくて。」

「ううん。いいの。今まで楽しかったから。それだけで私は十分だよ。」

本当に申し訳無いな。

「でももう会えないかもしれないんだぞ。」

「いいの。お父様が決めたことでしょ。それなら私に文句はないよ。」

「そうか。本当にすまんな。…そうだ。お前にはこれをやろう。」

そう言って俺が懐から取り出した物は3つの小さな鍵だ。

「お父様、これは？」

「これは俺の能力の欠片。これでお前は俺の能力の一部を行使できるようになる。

……もちろん諏訪子と神奈子にも渡しておく。俺はこんなことしかできんからな。」

「いいえ、お父様。ありがとうございます。」

どうやら喜んでくれているようだ。本当に良かった。すると神奈子は。

「いいのかい？もらって。神羅の能力って相当ヤバイモンじゃなかったかい？」

そう言われる。大丈夫だろう。

「風歌なら大丈夫だろう。それに能力はおまけだ。それにはあるものを仕込んでいるからな。」

「そうかい。まあ詳しくは聞かないさ。でも元気でやりなよ。」

「ああ、そっちもな。」

すると神奈子は、

「私達の他に女を抱くのは構わないけど、絶対幸せにしてやりなよ。」

「ああ。分かった。それじゃあな。」

そう返し、後ろを向く。すると諏訪子は、

「神羅ぁ。本当に行っちゃうの？」

「ああ。諏訪子も元気でな。じゃあもう行くぞ。またな。」

そう3人に別れを告げる。そして俺は飛び立った。

そのあと後ろから、諏訪子が

「神羅ぁ～～～～～～～！」

と叫んでいた。本当に行きにくいな。

そう思いつつ俺は俺にとっての始まりの洞窟へ向かった。

――――――――――――――――――――

――――――そして洞窟内。

俺は1年前に発見した穴の前にいる

「よし、行くか。」

そう言い俺は穴の中へ進む。

中はとても暗い。だが真っ直ぐ一本道のようだ。ただ、ここが暗いというのは光が入ってこない、

というよりは周りに充満している魔力が原因だろう。

解析をかけても魔力が濃いのでそちらに解析がかかる。

が、魔力が一直線になっているのでこの穴はまっすぐになっていることが分かる。

……しばらく進んだところに魔力が溜まっているところがある。

どうやらそこが出口のようだ。

そして俺はそこまで到達した。そして俺はそこで、見たこともないような世界を見た。

風景はさっきまでの世界に似ている。が、見たことがない動植物がいるのだ。

羽の生えた猫や目の赤い黒い狼、皮膚の黒い人型の悪魔見たいな奴から黒い竜までいる。

そして植物にも紫色の粒子を出すものや動く物がある。それに空気中の魔力が濃い。

普通の人間ならすぐに酔って失神したり、最悪の場合、発狂して死ぬだろう。

そういう場所なのだ。この世界は。

俺はとりあえず近くに村がないか探すために飛びたった。

探し始めて数十分がたち、俺は村というより街という規模のものを見つけた。

俺はそこに降り立つ。周りの住民は俺を奇異の視線で見ている。

俺は見られつつ歩いていた。するとその時、一人の老人が俺に話しかけてきた。

「ちょっと待つのじゃそこの若いの。お主、ここじゃ見ない顔だのう。

どこから来たのか、ちょっとばかし教えてもらえぬか？」

老人はそう言う。俺は老人に対し、自分のことを話す。すると老人は、

「ほっほっほ、そうじゃったか。人間界から、のう。どうりでここじゃ見ない顔じゃ。

……お主、神羅と言ったか？ワシはこの街を管理しとる者での。散歩しておったんじゃ。

そしてお主を見つけたのじゃ。ここじゃ見ない顔じゃから目立ってのう。

……どうじゃ？お主、一度ワシの家にこんか？ちょうど暇じゃしの。

」

ここの街の長を務めていると言う人はそう言う。俺にとって好都合なので承諾し、長について行った。

そこは大きい建物の隣に建つ、普通の大きさの家だった。その入口で長は、

「さあ中に入りなさい。」

と言うので、お邪魔させていただくことにした。

その家の中は本当に普通の家だった。

豪華でなく殺風景でもない。ただ使いやすさを追求しただけの作りだった。

俺はそこで長に聞いてみた。

「なあ長さん。この世界はどうなっているんだ？」

すると長は思い出したように、

「ぬ？どうなっているとな？……おおそうじゃった。お主は人間界から来たんじゃったのう。

なら教えてやろう。この世界のことはみんなこう呼ぶ。そう――――――。」

俺はこの言葉で、今までのことを理解する。

そして、長の言ったことは、俺の予想と重なった。この世界の名は――――――。

――――――――――――――魔界じゃ。」

そう、魔界。人間界に似ているが明らかに違う。

そして何より、こんなに魔力に満ちた場所などそんなにない。

そう考えていると、長が俺にこう言った。

「ではお主に改めて言うぞ？

――――異界の者よ。この魔界へよく来たのう。歓迎するぞ。」

こうして俺の、魔界での生活は始まった。

主人公設定（魔界編）（前書き）

結構チートになったかな？

主人公設定（魔界編）

名前：創理（つくり）　神羅（しんら）

神名「アカシャ」
（アカシックレコード、アカシャ記録から。神羅→森羅→森羅万象みたいな感じ。）

性別：男性

属性：中立・中庸　特性：矛盾・混沌

神格「幻想神」「現（実）神」

能力：「幻想と現実を司る程度の能力」

ｆａｔｅ風設定

能力値（平常時）

筋力：Ａ－　魔力：Ａ＋（気、霊力含む。神力９５％制限）
耐久：Ｂ＋＋　幸運：Ｂ－
敏捷：Ａ　宝具：ｎｏｔｈｉｎｇ（無使用）　ｏｒＢ－（制限）

全力時（神化）
筋力：ＥＸ　魔力：ＥＸ（気、霊力含む神力制限解除）
耐久：ＥＸ　幸運：ＥＸ－
敏捷：ＥＸ　宝具：測定不可（使う武器は全て神具となる。）

固有スキル

不滅（限定）：ＥＸ
存在そのものに「幻想と現実を司る能力」を
刻まれ、幻想か現実（生物等で可）さえあれば
存在できる。自分の持つ幻想と現実両方を
自分にぶつけるくらいしか完全に消え去る
方法は無に等しい。

神性：Ｄ－～ＥＸ
神格を持っている故に最高ランクだが、
平常時での必要性は感じないので
低めに抑えられており、周囲より
少しだけ目立つ程度になっている。

神眼：ＥＸ
いろいろ応用が出来る便利な力。
物体、物質の解析から透視、感知、
目から熱線や軽い暗示が出来る万能の眼。
千里眼や心眼も使える。

実現：Ｅ～ＥＸ

水や日用品、雑貨などから武器、宝具、
その他目に見えないものも現実に出せるようになった。

神言：ＥＸ
神格を得た際に手に入れた力。簡単に言うと
何らかの現象を言葉で起こしたり、なにかを
支配したり出来る。普通の人間や生物には全く
抵抗が出来ない。能力の行使にも使える。

武器

神斬（かみきり）
前まで普通の刀だったが、神を斬り、血を浴びたことにより化けた。
通常時での切れ味も半端ないが、
神様やそれに準じるもの、神性のある者に対し、
絶対的な効果を発揮する。

神様から貰った力
1．「幻想と現実を司る程度の能力」

2．武器
上の１の能力に沿った内容のアイテム。
鍵型の「幻想之主」と本型の「現実之書」
どちらもそれぞれの能力に沿っているので、
能力の端末としても使える。この２つを
組み合わせることにより、アカシックレコードに

接続できる。

3．改変・改造能力
何かに効果、属性を付加、追加したり、形状や
特性を変えることが出来る。物体の強化、固定化、
硬化、軟化はおろか、昇華、色彩の変化ができるようになった。

4．世界樹の苗木
その名のとおり、世界樹の苗木、
マナを大量に出している。

5．神様からのオプション
身体能力や容姿、情報、助言、その他の設定等
便利なものをいただいた。

技

鏡面界
あらゆるものを反射する壁を展開する。
発動時には「鏡面界・〇〇展開」又は、「鏡面界・〇〇反転」と発言する。
また、半球や球体で展開した場合、内部か外部のどちらを反射するかを
選ばなければならない。

魔法

俺が来たこの世界は魔界らしい。

この魔界は、空気中に魔力が満ち、その影響を受けた動植物は、独自の進化をしているそうだ。

そして俺にもその魔力があり、魔界の中でもかなり多い方らしい。

まあ魔界で魔力を使うと、魔力の少ないところよりかなり大きな効果が得られるらしい。

そして使った分はすぐに空気中から取り込めるので、魔力量が少なくても苦労しないらしい。

まあ使える技は制限されるらしいが。この長の魔力量は平均的らしい。

そこで俺は長に聞く。

「なあ。魔力ってどんなことが出来るんだ？」

「魔力でか？そうじゃのう、普通に弾として飛ばすこともできるが、やはり技かのう。」

「技？」

「そうじゃ、お主も自分の力でやったことくらいあるじゃろう？結界じゃったり、盾じゃったり。

わしらはそういうモノに魔力を使うことを一般的に“魔法”と呼んでおる。」

「魔法、ね。それってどんなことができるんだ？何か特徴でもあるのか？」

「魔法はお主ら人間の使う力とそんなに大差ない。こっちのものも、そっちのものも、

力を変換することが出来るじゃろう？炎とか、水、雷のようにの。

だからあまり変わったところはない。

人間界にも魔力を持つものもいるじゃろうしの。ワシは産み出されて長く生きておるが、

特に変わったことは何もない。時代が変わるくらいじゃのう。魔法についてワシはこう思っとる。

何を使うか、ではなく、何に、どのように使うか、が大事じゃと。」

「……なあ、長。俺もその魔法っていうの、使えるか？」

長の話を聞き、俺はそう聞いた。

「……ふむ。お主も使えるじゃろう。」

そこで長は悲しそうな目で語る。

「……しかし時代は変わってのう。今は魔法についての本が沢山ある。

…昔は研究者がたくさんおって、色んな者の独特で、面白い魔法が多かったが、最近は本に載っておる

モノを使う奴ばかりじゃ。今の魔界の魔法は、ただの手段や方法の一種になって面白みがない。

お主。もし良ければ、魔法の研究をしてみらんかの？

今の魔界の若者は、教科書どうりというか、手本に沿っていて、魔法を深く知ろう、

魔法の可能性を追い求めよう。とする者が少ないのじゃ。じゃから、もし良かったら、

ここで研究していかんかの？もちろん基本はワシが教える。そしてお主自身の魔法を創ってみらんか？」

俺はその長の、願いとも言える話に、

「ああ、分かった。やってやる。俺は俺だけの魔法を創ってやる。」

「……そうか。ありがとのう。」

「いや、礼をするのは俺の方だ。魔法のこと、教えてもらうんだからな。」

「…そうか、そうじゃのう。では明日から教えるが、それでいいかの？」

「ああ、それで構わない。」

「じゃあ明日までに準備しとくからのう。今日はゆっくり休め。」

そう言って長は家の奥に入っていった。

……寝るか。

――――――

がした。

「何か抜ける感覚がしたじゃろ？今のが魔力じゃ。分かるかのう？」

「今のは微妙だった。もう一度頼む。今度は思いっきり持って行け。」

「…まあいいじゃろう。それではいくぞ？」

俺は自分の中に集中する。すると長の魔力が入ってきた。

これは俺も分かる。自分のものじゃない感触だからな。

すると長の魔力が一旦停止した。そろそろ来るか。俺は集中する。

すると長の魔力は俺の中の何かをつかみ、引き抜いた。

（今抜けていくもの。これが魔力か。）

そう心の中で思った俺は、抜けていくものを自分の体に戻そうとする。

そして俺は自分の体に自分の何かが入る感じがした。今なら分かる。これが俺の魔力だ。

「感じ取れたようじゃの。じゃあそれを操れるか？……まずは体の外に放つことからじゃ。」

（放つ、か。）

俺は自分の魔力を引き抜かれる感覚とは別に、手から出そうと、球状にしようとする。

……そして手のひらの上に出す。

「ほう。もう操作のコツを掴めておるのか。成長が早いのう。」

長はそう言う。どうやらこれでいいようだ。

「そこまで出来とるなら次に進んでいいじゃろう。次は形を変えることじゃ。」

俺はこのあと、長の言葉に従い、様々なことをした。

形を変えること。弾にして飛ばすこと。その場にとどめること。動かし続けること。

あと、魔具に魔力を流したり、魔具を使ったりもした。

こうして鍛えてみると、とてつもなく便利なものに思えた。

そして一通り終わったので、次の日、属性の練習をするそうだ。

そして翌日。

「今日は昨日言ったとおり、魔法の魔法らしいモノを教えるからの

う。」

長はそう言って、一冊の本を取り出した。

「基本的なモノはこれに書いてある。これを見てやってみろ。」

長はどうやら直接は教えてくれないらしい。

「魔力を別のモノに変えてみる感じじゃ。…物足りなくなったら家の本棚の本を読んでもいいからの。」

ふむ。これは初歩の初歩の本らしい。結構年季が入っている。

「ワシはこれから仕事があるんでのう。後は自分でやってみなさい。じゃあの。」

そう言って長は家を出る。本の内容は一通り理解した。

そして俺は本棚の方に目を移す。そして本棚を物色する。

だいたいこう言う時は本の後ろとか、本棚の下か裏に何かあるもんだよな。

（ん？なんだこれ。）

そして俺は何かを見つけた。本棚の下の隙間に挟まっていた物。それは本だった。

かなり古くボロボロで、表紙は何かの皮。書いてある文字は読めない。そんな本だった。

「これはとんでもないものじゃないのか？でも読めな……そうか！」
俺は神眼を使用し、この文字に対し、解析をかける。すると、
（何かの呪文？魔法名と詠唱しか書かれていないな。しかしこの魔法名から察するに古代のものか。）
俺はこの本に解析をかけ、その内容を覚える。
（これは広いとこじゃないと試せんな。）
そう思いつつ、まずは基本の練習をした。
まあ炎とか光とかは出せたから別にいいか。本は長に聞けば分かるだろうからな。

その後、長が帰宅するまでの間、ずっと基礎の練習をした。

――――そして長帰宅――――――。

「ただいま帰ったぞ。どうじゃ？出来るようになったかの。」
「まあ大体な。それより長。この本ってなんなんだ？」
「ん？どれj……この本は！お主、この本をどこで！？」

「いや、本棚の下で見つけてな。それでこれはなんなんだ？」

「うむ。その本じゃが、まずは礼を言わせてくれ。その本を見つけてくれて本当に感謝する。

……その本は大昔に手に入れた物でのう。古代語で書かれておって、わしにも読めんかったが、

多分、魔界の創造神様が創った当時の本じゃ。記念にとっておいたがのう。なくしたと思っておって、

ずっと諦めとった。まさか見つかるとはのう。……で、その本の内容は分かったのか？」

（わしにも読めんのじゃ。いくらなんでも読めるわけがないの。）

「ああ。一応読めたぞ。何かの呪文が書かれていただけだがな。」

「…！お主、それを読めるのか？魔界の者じゃないのに。いったいどうやって……？」

「これを使ったんだ。」

俺はそう言い神眼を発動する。

「こ…これは、もしや！……お主、神の一種だったのかの？」

「ああ。…なら改めて話そう。俺は神羅。人間界で神になった。今までと同じように接してくれ。」

「そうじゃったか…。まさかこの年になって人間界の神に会うとはのう。驚いたわい。」

「それで、この本はどうする？」

「…お主にやる。持って行け。読めない者より読める者が持っておったほうがいいじゃろう。」

「そう言うならありがたく受け取っておく。で、魔法の件だが。」

「……そうじゃったのう。して、どれくらい出来るようになったんじゃ？」

「ああ。こんくらいだ。」

俺はそう言い、炎球を出し、自分の周りを回らせる。

「お主は本当に成長が早いのう。…あい分かった。それじゃあ明日から本格的な魔法を教えてやる。」

そう長は言う。まあいいだろう。俺も少し疲れたからな。

今日から本格的な魔法の練習らしい。

「じゃあお主に話しておくぞ。魔法には、多くの種類がある。
まずは攻撃魔法。これは炎や水、土や雷、風といった様々な属性で敵や的を攻撃するものじゃ。
次に防御魔法。これは攻撃とは逆に自分の守りに使うものじゃ。土や風、まあ空気じゃの。
それらのモノで壁や盾を作る。まあ魔力だけで作る者が多いがの。
次に回復魔法。これは身体強化の発展系じゃ。身体の細胞の活性化等を行い、傷を塞ぐものじゃ。
まあ今は活性化じゃなくまんま治癒や直接治療が出来るまでになったがのう。これは嬉しいことじゃ。
その次は幻惑魔法。これは相手の目を欺いたり、自分の分身を作ったり出来る。使い手によるがの。
また操作魔法みたいに何かを操るものや。呪い、文字など様々な形がある。
その中でも珍しいのが、個人で研究した独自の魔法じゃ。
この魔法は極稀に奇跡とも言えるものを作るものがおる。個人で作った故に他人には覚えずらい、
今一般的に使われているものはそういう魔法を分かりやすくしたものじゃからの。

今まで作られた独自の魔法は主に、時間操作、空間操作、後は音のものもあったのう。

そういう魔法を作れる者達は“精霊”と言う者の存在に気づいた者たちばかりじゃ。

精霊とは自然の象徴。または自然そのものと言って言いじゃろう。

今の魔法はその精霊を使役するものじゃ。言葉や手、様々な物で術式を作り、精霊の力を借りる。

そういうものじゃ。簡単にされておるがのう。そのオリジナルは凄いモノと言われた。

わしが作ったがのう。その他にも色んなものが存在する。呪文なしで魔法を使うものもおった。

今は研究する者自体少ないが。……まあこれくらいかの。」

長は俺に魔法の説明をすると、懐から棒を取り出し、俺に渡す。

「その棒は練習用の発動体じゃ。しばらくすると必要なくなるがのう。

それと、お主には呪文など教えぬ。全てお主の考えた言葉で紡げばよい。ここじゃ危ないから移動じゃ。

ここはちと狭すぎるからのう。」

長はそう言い、家を出る。俺もそれに続く。

そして町外れの広い草原に来た。

「ここなら大丈夫じゃろう。いまから実演をするから、まあ見ておれ。」

そう言い長は、手を俺とは逆方向に向け、

＜火よ、焼き払え。＞

そう言う。すると、長の手から火が出て、草原の草を焼く。

「まあこんな感じじゃの。一般の者が使う魔法は呪文が決めてあるが、ワシは自分で作る。

ワシのオリジナルのやり方じゃ。……と言っても。魔法名を叫ぶのが恥ずかしかったんじゃが。」

ふむ。それでここまで作り上げるとしたら、この長、かなりの実力者じゃないか。

「まあ魔法の名前を言う方が成功しやすいんじゃが、そのへんは自分で決めてくれ。

ワシは自分の都合でこうなったんじゃし。まあやってみれ。」

長がそう言う。自分で決める、ね。そういやあの本、試してみるか。よし。

そう思い俺は長から貰った本を開く。長が何か言っているが気にし

ない。…ふむふむ。

＜それは裁き。邪なる者たちへの神の怒り。＞

＜我に逆らうものを悪とし、我に従うものを善とす＞

＜神はその雷をもって、全ての悪に終わりを告げる＞

――――≪終焉告げる神の雷霆≫――――

そう唱えた瞬間、

ゴロゴロゴロ、ピシャッ、ドゴォォォ

長がそう言ってきた。

「全く、ワシが何をしておると聞いても無視をs……まあ過去のことをどうこう言っても仕方ないの。」

まあ俺もこれはやりすぎたと思う。これはあまり使わないほうがいいな。

「…まあよい。もう街に戻るぞ。ワシは疲れたわい。」

そう言い、街に戻った。

街に戻った時、長がさっきの雷についていろいろ住民から言われていた。

俺と長は長の家に帰ってきた。

「ふぅ。今日は疲れたわい。」

長はグッタリしている。仕方のないことだろう。今まで住民に囲まれていたのだから。

「お主のあの詠唱、あれから察するにお主にやった本は、神の業の再現のようじゃのう。

全く、神様のマネを魔法でやるとは、それを記した者は規格外な奴じゃのう。」

あのー、長さん。俺はあんたからこれを貰ったんだが。長も十分規格外だよな。

「まあいいじゃろう。その本のことが知れただけでも。」

長はそう言い、自分の部屋に入っていった。

そういや練習用の棒、いつの間にか砕けてたな。

俺はそう思いつつ、寝るのだった。

その次の日からは悩んだ。練習をする場所にだ。

この前みたいなことが起きないように、どこか迷惑がかからない広い場所があれば、と思った。

そこで俺は思った。無いなら自分で作ればいいと。

確か長は言っていた。空間操作の魔法もあった、と。誰かが作っていたはずだ。なら出来る。

俺はとあるものを出す。それは「幻想之主」と「現実之書」だ。

それを俺は組み合わせる。そして、アカシックレコードに接続する。
そして検索ワードを打つ。
ちなみに俺はこれをパソコンのように使っている。
組み合わせたものを中心として、球状に囲むような膜の中に、空中投影型のモニターやキーボード。
それを俺の使い易い配置で展開している。これらの基本色は透けている水色だ。説明は以上だ。
俺はこれで空間魔法について検索する。その結果。
空間魔法について、というものが表示された。どうやら情報をすべて統合し、一つになっているようだ。
俺はそれに目を通す。その中で分かったものはあまりなかった。
だが参考資料は多いようだ。何かの中に空間を創ったり、空間を歪め、拡張するものが載っていた。
俺がその中で選んだものは、
ダイオラマ魔法球という、ネギまという作品に出てくるものだ。
あれならば場所を大きく作れるし、自分の好きなように改造できる。
そう思い俺は作成に取り掛かった。

～～～～～数時間後～～～～～

な、なんとか形になったか？

一応試作型が出来たが、本当に苦労した。何に苦労したかというと、材料だ。

まず、容物の調達をしないとならなかった。

そのあと、どんなモノにするのかを決めなくてはならない。

まあ出来上がったものはただ広い草原が広がるだけのものだ。

一応改造を施し、外の一時間が中の三時間に設定する。

そして俺はその中に入った。

魔法球の中は広いとしか言いようがない。ここなら練習の場にピッタリだろう。

だがあの魔法書の内容の物は危ないからな。少し球自体を強化しないといけないだろう。

そう思った俺は外に出て、魔法球の改造を始める。

ふむ。魔法球の材質を変えるか？いや。ここは拡張でいいか。

内部もただの草原じゃあ寂しいから、何かの建物でも造って……。

そんなふうにこの日は終わった。

――

――――翌日。

俺は長に突然の免許皆伝宣言をされた。どういうことかというと、昨日の空間操作魔法が決め手らしい。

長によると、

「もうそれだけ出来るんじゃから、もう教えんでも良いじゃろう。」

ということらしい。まあ今までやりすぎたしな。

「と、言うことで。お主にはとある大会に出てもらう事にした。」

長はいきなり訳の分からないことを言い出した。

「な、何をいきなり言ってんだ？ついにボケたか？」

「ワシはボケてなんかいないわ！大会じゃ大会。お主に出てもらおうと思っての。」

頭はおかしくない……のか？だが大会？

「で？一体なんの大会なんだよ。」

「うむ。魔法の大会じゃ。」

「魔法の大会？どうして俺がそんなもんに出るんだ？」

「うむ。この大会はの。魔界中の猛者を集っておるんじゃが、各街や村から数人ずつ参加できるんじゃ。そこでワシはお主を推薦しようと思うのじゃ。

まあ予選とかがない分楽じゃろう。少し腕試しがあるがのう。」

「まあ別にいいんだが。その腕試しってなんだ？」

「まあ話は簡単じゃ。魔獣を沢山倒せばいいんじゃよ。魔獣の強さはその時によるがの。」

長は、わしが推薦するのはお主が初めてじゃ。と後につけて言う。

それにしても大会、ね。

「まあ参加してもいいぞ。で、その会場はといつ行われるかを教えてくれないか？」

「うむ、説明しよう。この大会はちょうど十日後にある。場所はこの魔界を創ったお方の城じゃ。」

「ま、待て長。創ったお方って、魔界を創った奴が生きているのか？」

「ん？そのことかのう。ああ生きておられるぞ。あの方はこの魔界や魔界の住民を全て創った、

この魔界の唯一の神様じゃ。名前は“神綺”様というお方じゃ。」

……神綺、か。確か東方では旧作のキャラだったはずだ。

その能力は「魔に関するものを創造する程度の能力」、だったかな？

その能力を用い、魔界を創ったとされているキャラだが、まさかこんな形で会うことになろうとは。

「まあそれは置いといて。お主の場合は推薦じゃから、腕試しの為に、五日後に行かなければならん。

…まあ腕試しは少し厳しいが、お主なら楽勝じゃろう。」

「……まあ俺にとっても別に悪い話じゃないし、断る理由はない、か。よし。参加しよう。」

「おお。そう言ってくれると思っておったぞ。じゃあ明日の夜、出発するからのう。」

……は？

「おいおい、時間は五日後って話じゃなかったか？」

「ん？そうじゃよ。じゃがこういうのは早めに行くもんじゃろ。準備に一日やるからのう。」

「…ハァ。分かったよ。従うさ。」

「そうかの。それじゃ準備しとくんじゃぞ。」

そう言って長は自分の部屋に入っていった。

明日は何すればいいんだよ……。

次の日の朝から、俺は魔法球の中にこもって魔法の練度を上げていた。

思ったが俺、魔力操作と魔法書のヤツしかやってなかったんだよな。

まあ魔法を使わなくても大体の奴に勝てるけど。目から熱線やら光線やらも出るし。

そんなこんなで俺は魔法の修行をしていた。

火の弾出したり。水を出したり。風を吹かせたり。まあ色々。

そして、そろそろ頃合かと思ったところで、アレを開く。そして詠唱する。

＜それは破壊、九つの錠を持つ匣の内＞

＜それは文字に鍛えられ、天の獣を撃ち落とす＞

＜神が手にしは破滅の象徴。それは世界を焼き尽くす＞

――――――≪全てを破壊す災厄の焔≫――――――

そう唱えると、俺の目の前や周り、見える範囲全てが火の海に変わる。

ヤバイ。非常にヤバイ。これはやりすぎた。

今俺が使ったものは、世界を焼き尽くしたとされる、破壊の杖。

まあ矢とか槍とかいろいろ言われているが、「レーヴァテイン」というものを再現した魔法である。

いや、俺もここまでのものとは思わなかった。だって魔法球が割れそうだもの。

何かミシミシと嫌な音がしt……ん？嫌な音？

嫌な予感がして空の方を向く。その目線の先。魔法球の内側の壁にヒビがって……マジで？

ちょっとぉぉ！ヒビが入ってるよ！あんなに丈夫に作ったはずなのに。

魔法一つでヒビって、どんだけ威力あるんだよ！

俺がそう思っていると、景色が変わる。どうやら魔法球の外に強制排出されたようだ。危なかった……。

その後、後ろからガラスの割れるような音がした。そちらを見ると、やっぱり。

魔法球は割れちまったようだ。頑張って作ったのに。

まあまた作れるからいいか。そう思いつつ諦めることにする。

そして家の椅子に座っていると、長が家の奥から出てきて、

「ん？なんじゃ、もう準備はできたのか？」

そう言う。まあ準備というより修行してたが、まあいいか。

「ああ。もう大丈夫だ。いつでもいけるぞ。」

「そうか。なら二時間後くらいに出るかのう。」

「分かった。それまで待っておくぞ。」

そして二時間が経つ。

―――――――

俺と長は家から出た。さあ出発だ。

「よし。行くぞ？」

「なあ長。行くって言っても、どうやって行くんだ？」

「ん？飛んでいくに決まっとるじゃろ。何を不思議がっとるのじゃ？」

「いや待て。飛んでいくって、その城が有るところに行くのにどのくらいあるから言ってんだ？」

「なんじゃ、距離の心配かの？なに、心配はいらん。直線で行くなら半日。

迂回していくなら一日から二日程度じゃ。本当に何も心配は要らん。」

「…なあ、その道って危険なところがあったりするか？」

「まあ山を越えるときくらいじゃが、飛んでいくから大丈夫じゃろ。お主、強いしの。」

「まあ長がそこまで言うならいいんだが……。」

「いいかの？では行くぞ？」

「はいはい。」

そう言って俺たちは飛んだ。

そして神綺の城があるという所へ向かう。

一体、神綺の城とはどういうものなのか。そう思いつつ俺は飛ぶ。

魔界の魔力の中を。

新規

俺は今、長の街の数十倍ある位の大きさの都市。多分魔界で一番大きいと思われるところにいる。

この都市は大きな城を中心に、住宅街や商業区、農地、工業区などに別れ、都市と言っているが、

何十個もの街の集合体と言ってもいいだろう。まあそれでも魔界はまだまだ土地が余るほどの広さだ。

まだ未開の地があったり、いつの間にか知らないところがあったり、どんどん広がっているらしいけど。

そしてその都市の中にあるホテルに泊まっている。

ちなみに言っておくが、この魔界、技術力は結構あるからな。電気とかも作れるし。

いうなら魔力発電か。それと近代兵器は魔法があるためない。だから自然は多いが、技術は人間界よりも

発展している。確か原作の時は魔界の観光ツアー会社が原因だったはずだ。

まあ今の魔界の街並みを簡単にいえば、ファンタジー系のゲームの中みたい、と言えるだろうけどな。

そう自分の状況を説明していると、長が部屋に入ってくる。
「お主、少し散策せんでいいのか？あと二日くらいあるから、暇なら行ってくるといい。」
「まあそのうちいくさ。それより俺は大会で何をするんだ？」
「……ふむ。詳しいことを話そうの。この大会は魔界全体から強者を集めていることはもう話した
じゃろう。この大会は年に一回の、まあ昔からの伝統じゃな。昔から魔法や武術の腕を磨いておる者
が多く出る。ときどき魔界の外からも来る者もおるしの。簡単に言えば、魔界の最強の者を決める
大会じゃ。ちなみにわしは第一回の優勝者じゃがの。」
そうか。伝統的な大会なんだな。と思う前に、長が優勝経験者って……。
この長、本当に只ものじゃないな。今の魔法の開発者とかも長だろ？
「まあなんでもアリの試合と思っておけばいいじゃろ。文字どうり何でもありじゃがの。」
毒を盛るとかはいかんが。と長は言う。
「……大会のことは分かった。で、優勝したらどうなる？大会だか

ら何かもらえるのか？」

「いや？別にこれといってないのう。賞金くらいじゃろうな。」

「じゃあなんで俺はこの大会に参加したんだ……。」

「…お主がこの大会で勝ったら、わしと戦ってもらうためじゃ。」

「いきなり何を言い出すんだ？長と戦う？何故？」

「まああれじゃ。弟子の卒業試験みたいなもんじゃ。お主がどれほど強いかを知るためと思っとれ。」

「いいのか？俺と戦ったら死ぬぞ？長はそれでいいのか？」

「大丈夫じゃよ。わしはまだこんなところでは死なん。心配するでない。」

「……まあそこまで言うなら。」

「そう言うことじゃ。ほれ今のうちに都市の中を見ておけ。ほれ。」

そう言い長は俺に金の少し入った袋を投げる。

「それはお主が自由に使って構わん。それだけあれば十分じゃろ。」

「ありがとな長。じゃあ俺はちょっと出て来る。」

そう言い俺は都市の中を見に行った。

俺は黒いフードを被って見回っている。流石に目立ちやすいからな。
俺。……しかし、
ここの都市は実に充実している。今までの場所に比べると迷いそうだ。
高い位置から周りを見渡してみると、建物や川が魔方陣を描くように設置されているな。
そして歩いて見回っていると、不良の溜まり場らしいところもある。
やっぱ人口が多くなったりすると
こういうのも増えていくのかねぇ。
そう思いつつ見回る。街は非常に活気がある。大会前だからか屋台も見かけ、人が多い。
こういう時に誰かが何かやらかすんだｙ　ボゴォォンッ！　思ったそばからか。
音の方を見ると、路上で二人組が喧嘩をしていた。ストリートファイトかなぁ。あんまりやりすぎると
周りに被害が、あーあ周りの屋台が……。

俺は仕方ないから止めに入る。魔界人の構造は知らんが、ぶん殴ればなんとかなるか。

そう思い俺は走る。

そして喧嘩のあっているところに飛び込み、片方の角っぽいのが生えている奴の腹を殴り飛ばし、

その次に体の少し大きいほうは顎を拳で打ち抜く。そしてこの場所から離れ、人混みの中に紛れる。

この間約五秒。

しかし五秒もかかったか。暗殺者っぽい動きになったがな。誰かに見られてないことを祈ろう。

そして俺は散策を再開ｓ「食い逃げだぁー！」また厄介事か。

そう思い声の方へ行く。すると太った奴がこっちに走ってきた。

後ろの鍋持った奴が何か言っている。食い逃げに鍋持って追いかけるとか。いつの奴だ全く。

「おい！そこの兄ちゃん！そいつ捕まえてくれぇ！」

まあ暇だしいいか。と思った俺はこっちに来ている太った奴に向けて構える。ただの殴るだけの構えだ。

そして魔力を拳に収束させる。それを太ったやつに対して――――

――――。

「そこのおめぇ！邪魔だ！どけぇ！」

――――――――ぶち込む！！！！！！！　ドッパァァァァァン！！！！！！！！！！！

何かすごい音がしたが、大丈夫だろう。

そして俺はすぐにそこを離れる。目立つからなぁ。今のは。

さて、今度は厄介事が無いといいが。と俺は少しの希望を抱きながら散策を開始した。

でもこういう時は何かと事件が起きやすいからなぁ。

・・・

・・・

俺はこの体験の中で、魔力の戦闘での使用法を考えている。他の力でも応用が利くと思うからな。

あと分かったのは、魔界の攻撃方法が魔法だけじゃなかったことだ。時々銃使ってたり、術式込めた球を使ったりする奴がいるんだよ。

まあこの話は別にいいだろう。

疲れた俺は、今静かな空き地にある土管の上に座っている。大通りは人が多いからな。

ここは中心の城に近いが、少し入り組んだところにあるため人はいない。

ここは基本的に何もない。それに人気がないからゆっくり休める。

まあ時間を忘れてしまいそうになるがな。

俺がそう思っていると、この空き地に誰かが来た。見たところ女性のようだ。フードで顔が見えないが。

タッタッタッと足音を立て、なぜか走ってこっちに来る！？

「ちょっとあなた、少しの間匿ってくれないかしら。ちょっと追われてるの。

私がここに来たか聞かれたら来てないって言って。私は隠れてるから。」

この女性はそう言って、空き地の隅の方の木の後ろに隠れた。
すると女性が来た方からまた誰かが。…今度は金髪の赤いメイド服を着た女の子？
「すいません。この辺に女性が来ませんでしたか？こっちの方に来たはずなんですけど。」
「ん？フードを被った人なら来たよ。あっちの方に走っていったけど。何かあったの？」
「……いえ、ありがとうございました。……全く。どこに行ったんだろ。」
メイドのような娘は俺が指を指した方にブツブツ言いながら走っていった。
姿が見えなくなったところで、隠れていた女性がこっちへ来る。
「ありがとう。……あなた魔界の人じゃないわね。まあ助かったわ。じゃあまたねっ。」
女性はさっきのメイドらしい娘とは逆の方向に走っていった。
そろそろ帰るか？することもなくなって暇だし。
そう思い、俺はホテルへ帰った。

・・・

がのう。」

「ちょっと待て。その戦う魔獣ってなんなんだ？最高ランクって強すぎるやつだろう？」

「…まずはCランクから説明するぞ？」

長は俺の話を無視しやがった。

「Cは狼型の魔獣の群れじゃ。これは楽勝じゃのう。次のBは怪鳥という奴じゃ。これは一体じゃから

お主には楽勝じゃ。そして次にA。これは魔獣ではない。魔界の傭兵団、一個小隊位じゃ。

この傭兵たちはこの試験に使われる魔獣を捕りに行っている者達じゃ。中々の実力じゃの。

その上のSは大蛇じゃ。このS辺りの魔獣から強くなっているのじゃ。捕ってくる方も大変じゃし。

この上のSSは傭兵の方も捕ってくるのに命をかける程のドラゴンじゃ。防御が硬くて強い奴じゃの。

そして最高ランクのSSSは、捕獲できたのが奇跡と言われる位のドラゴンじゃ。今はこの闘技場の

地下深くに封印されておるがの。こいつはとてつもなく強大な力を持っておる。

まあお主ならなんとかなるじゃろう。お主には魔法書もあるのじゃからな。・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・ということでお主の試験難度はＳＳＳに決まったのじゃ。もう変えられんからのう。」

「ちょぉっと待てぇぇぇぇぇ！！！！！どうしてそうなった！！なぜ俺が一番難しいのを？」

「大丈夫じゃ。お主ならやれる。これをクリアするとかなり目立つぞ？わしが推薦したんじゃからな。」

もう何を言っても無駄に終わる気がしてきた。

「それにもう封印解除の準備はしてある。お主の力を見せるチャンスじゃろう。」

こりゃ、やるしかないみたいだ。でも人前であの魔法はなぁ……。

・・・・・・・・・・・・・・・

俺の前の前の順番の奴は大蛇をぶっ飛ばしてたな。ドラゴンに挑戦していた奴もいたが負けていた。

そして、俺の順番が回ってきた。俺は闘技場の真ん中にいる。

この闘技場は周りに被害が出ないために、強固な結界が張ってある。普通の攻撃じゃ傷もつかない。

俺がそう思っていると、いきなり地面が揺れ出した。そろそろのようだな。

俺は宙に浮き、出てくるのを待つ。すると闘技場の地面が割れ、魔獣が出てくる。

闘技場を普通に超えるくらいのでかさだ。そして窮屈そうにしている。

その魔獣、ドラゴンは、体に無数の傷が刻まれており、まさに竜の王のような風格というか、存在感が

別物だ。そのドラゴンは今、口から太い熱線を出し、結界を割った。そして叫ぶ。

グルォォォォォォォォォォォォォォォン！！！

位置を考えると、ドラゴンより上で戦わないとならない。なので俺はドラゴンより上に行く。

ドラゴンは熱線を放ってきたが、ギリギリで避けた。

…さて、この場での広範囲攻撃は出来ない、か。なら雷か？でも効きそうじゃない。

……仕方ない、殴るか。

そう思った俺はドラゴンの腹の下へ向かい、魔力を込めた拳で鱗と鱗の隙間を殴る。

……効いてないようだ。広範囲がダメだから一点集中になるんだが、こうなると……。

そして俺はドラゴンの上の方へ行き、「グルォォオオオ！！」おっと危ない。

こいつは熱線がきついな。かなり太いから避けずらい。……まあ魔法を試してみるか。

俺は魔法書を開き、唱える。

＜それは裁き。邪なる者たちへの神の怒り。＞

＜我に逆らうものを悪とし、我に従うものを善とす＞

＜神はその雷をもって、全ての悪に終わりを告げる＞

――――≪終焉告げる神の雷霆≫――――

ゴロゴロゴロ…ピカッ！ドッゴォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！！！！

雷とは思えないほどの轟音が鳴り響く。……やったか？

俺は雷が落ちたときに閉じた目を開く。ドラゴンには効いているだろうか？

ドラゴンは、雷の中ったところの鱗は剥げて、血が出ているが、少し痺れたぐらいで、平気そうだ。

…あれでも死なないのか。やっぱり鱗が硬すぎるな…。外からは通りにくいか……。なら中か…。

鱗さえなければ通るんだが、待てよ？中…内側からならどうなんだ？あいつの主な攻撃は熱線……。

それを使うなら……いけるか？まあ試してみるしかないか。

そう思い、俺はドラゴンに、簡単な魔法をあて続ける。挑発するように。

まあこれだけやったら鬱陶しいと思うか、というところで攻撃を止め、魔力を溜め始める。

それにドラゴンが気付いたのか、ドラゴンは迎え撃つとばかりに熱線を口の中に溜め始める。

……本当、ドラゴンが挑発に乗ってくれてよかったよ。

そして両方がかなりの力を溜めたところで、構える。するとドラゴンの方も撃ち出すようだ。

……しかし俺はそのまま魔力を霧散させた。そしてドラゴンの口から今までにないほどの威力の熱線が

放たれる瞬間――――――。

俺はこの瞬間を待っていた。チャンスとばかりに俺はそれを使う。ドラゴンの口の中に、

《鏡面界：外部反転・球状展開》

俺は球状の鏡面界を口にハマる大きさで展開した。

するとどうだろう。熱線は１８０度反射され、後ろからの熱線にぶつかる。

そしてぶつかったところの熱量はドン！と跳ね上がる。まあ暴走とか暴発だな。

いくら熱に強かろうと、今の爆発的に作り出されるエネルギーには耐えきれんだろう。

さて、仕上げるか。俺は全く使っていなかった刀。神斬を取り出す。

《鏡面界：外部反転・自身展開》

そう唱え、自分に展開する。そして俺はドラゴンの口の中へ。…とりあえず牙は折っておくか。

ドラゴンの牙を折ったあと、俺は

《神力解放――――――制限ッ、解除！！！》

それと共に俺の体から膨大な力が溢れ出した。

そしてそのとき、世界と生命のの時間が止まった。ただ二人を除いて。

俺は体から溢れる神力を刀に収束する。すると刀は光り輝いた。

そして俺はドラゴンに向かって振り下ろす。さあ――――――――。

――――切り裂け。神斬！！！！！

俺の放った光の刃は、ドラゴンの身体をまっぷたつに分かれる。

その瞬間、ドラゴンの身体が光り輝くと共に、粒子となってはじけ

飛んだ。

そしてその粒子は、魔界中を一瞬。一瞬だけ明るく照らした。

そして俺は、地上に降りたんだが、それからのことは覚えていない。

――

目の前が真っ暗だ。いつの間に俺は寝ていたのか？

確かあのドラゴンがはじけ飛んで、地上に降りたことまでは覚えている。

まあ起きれば分かるだろう。

俺は目を開ける。…何か眩しいな。それにここは何処だ？

俺は今、どこかの豪邸の一室のような場所にいるようだ。もちろん見たことがない。

俺はとりあえず体を起こす。その時、俺の隣から「……ぅ～ん…？」という声が聞こえた。

俺は声が聞こえたほう。俺の隣に目を向ける。そこにいたものは……

……女性だった。何故に？

その女性の特徴としてはまず髪。真っ白というより銀っぽい色で長髪の一部をサイドテールにしている。

そして服装は体を包み込むような赤を基調とした服。そして同色のケープを着ている。

着ている服が少し大きめみたいなので、大人か子供かは判断しづらい。

まあ寝ているようなのでそっとしておこう。とりあえず、今は長に会って、結果を聞かねば。

そして俺は部屋から出て、走り出ｓ　ドンッ　「きゃあっ。」おっと誰かとぶつかったようだ。

「ぶつかってすまない。大丈夫か？」

ぶつかって倒れた人に、俺は手を差し出す。よく見ると女の子のようだ。

「あ、はい。こちらこそすみません。ありがとうございます。……あのっ、」

「大丈夫ならいいんだ。じゃあ俺はこれで。」

俺はそう微笑んで、部屋の前から走っていく。後ろでさっきの少女が何か言っているが気にしない。

――――――――数十分後。

俺は行く先々で出会っている人、まあ殆どがメイドとかなんだが。その人たちに、長の場所を聞いていった結果。俺が起きた部屋の隣の部屋にいたようだ。

なので俺はまたさっきの部屋の前に戻ってきていた。そしてその隣の部屋のドアを開く。

「ん？誰j……おお、お主。やっと起きたのかの。」

「やっと起きたって……、俺はどれだけの間寝てたんだ？」

「大会が気になるのか？…それなら心配は要らん。大会はお主の優勝じゃ。」

「俺はまだ試験を受けただけだぞ？それだけで決まるのはおかしくないか？」

「…ふむ。じゃあ大会の結果を教えよう。今回はお主以外の選手全

員の危険による、
お主の全戦不戦勝での優勝じゃ。試験のときにアレを消滅させてしまったからのう。」
「じゃ、じゃあ俺が参加した意味h「あら、こんなところにいたのね。」…？」
「いつの間にかいなくなっていたから驚いちゃった。まさかこんなに近くにいたなんて。」
「君は、俺が起きたときに隣にいた娘だな？どうしてここに？」
「どうして、と言われても。ここが私の家だか……あっ。」
「申し遅れましたね。この魔界は私が創ったの。私はこの魔界の神よ。私の名は神綺。よろしくね。」
この娘が神綺？……俺、最近忙しかったせいか、その辺りのこと、考えてなかったんだよなぁ。
「そうか。俺の名は神羅。こちらこそよろしくな。」
「……で、お主。大会に参加した意味を知りたかったんじゃろう？」
「おっと、そうだったな。長、教えてくれ。」
「うむ。お主が参加した理由は殆どない。ただ、あのドラゴンを倒させるためだけじゃった。」

「おい待て。なぜ俺がアレを倒すためだけに参加したんだ？弟子の卒業試験とか言ってたよな？」

「うむ。じゃがアレを倒したらわしより強いのは決定的じゃし。お主、大会優勝したし。

別にいいじゃろ。本当はアレを倒してもらうだけじゃし。本当に。」

「なんで長がそんなことだけのために。」

「いやー、あのドラゴン。実はわしが昔に捕獲したものでのう。わしはもう老いて敵わんから、

代わりに倒せる者を探しておって、そのときにお主を見つけたんじゃ。まさか神の類だとは

思わんかったがの。まあ結果オーライじゃ。」

「……なあ長。一つ聞くが。あの試験の内容、本当はあのドラゴン、入ってなかったな？」

「そこまで分かったのか？うむ。わしの一存で決めさせてもろうた。

なに。わしの言ったとおり勝てたじゃろう。良かったのじゃ。……

……あ！そうじゃった。それとな、

お主、わしの弟子卒業したから、もうわしの家には住ませられんぞ。

ちと寂しくなるがのう。」

「はあ？長、何言ってんの？ちょ、ちょっと待った、どこに行こう

としてんだ！？」

「では、わしはもう帰る。お主は来なくてよい。なに、わしは神様の幸せを願っておるだけじゃ。」

長は最後に意味の全く分からないことを言って、部屋から出て行った。

「さて、長のところが駄目になったから……と。もうそろそろ人間界にもd「あのっ！」ん？どうした？」

「あの、良ければこの城に住みませんか？部屋はたくさんありますよ？」

神綺がそう言う。そういやこの部屋にいたな。

「いいのか？別に俺はありがたいが。」

「いいんです。この城には私と従者たちしかいませんから。この城は大きいですし。」

「そう言ってくれるならお言葉に甘えて、しばらく世話になる。改めてよろしくな。」

「…せ、世話／／／／……ハッ！はい。よろしくね。」

というわけで、俺はこの城に住むことになった。神綺の顔が最後のほう、少し赤かったが、

俺は何か変なことを言ったのだろうか？そして、俺が居候になるっ

てことで、向こうが立場が上なので、
俺は神綺様と呼んだのだが、すぐに呼び捨てでいいと言われてしまった。まあ呼び捨てで呼んだら、
とても嬉しそうだったからいいが。

そして次の日、この城での一日目が始まった。
俺は昨日いた客室を使っていて、そこで目を覚ます。
ふう。昨日まで色んな事があったからな。久しぶりにまともな朝を迎えた気がする。
朝、といっても魔界には魔力が満ちているから、
外は人間界の朝と比較するとちょっとだけ暗いんだがな。夜は魔力で少し明るいが。
そう思いながら俺は体を伸ばす。ずっと休めていたからか、バキバキなるな。
それからベッドを少し整えようとベットカバーをどけるとそこには神綺が寝ていた。

あるぇー？俺、部屋間違ったかな？何でここにこの娘が？

「ん？もう朝……？夢子ちゃ……え？」

神綺は俺がいることに気づいて固まった。そのとき、部屋のドアが開いて、

「神綺様。ここでしたk……お楽しみのところでしたか。失礼いたしました。」

そう言って、赤い服のメイドが部屋を出て行った。ちょっと待てぇ！！

俺はさっき入って来たメイドを追いかけるために部屋を出る。そこで、

「そんなに急いでどうしたんですか？まるで誤解をされたみたいな……。」

今さっき出たメイドの娘は部屋を出たところに待機していた。

「……まあいい。とりあえず。中で固まっている神綺はどうすればいい？」

「そうですね。……っと。あなたは居候だから敬語じゃなくてもいいわね。

そうね、神綺様が動かないなら抱きしめてみればいいんじゃない？

多分動くと思うんだけど。」

「そうか。じゃあやってみる。」

俺は部屋に戻り、固まっている神綺のもとへ行く。神綺の顔はさっきより赤くなっている。大丈夫か？

そう思いながら俺は固まってる神綺を抱きしめる。すると

「…ふえ？…こ、これって……はふぅ。」

アレ？おかしいな。

俺が抱きしめたら神綺は気が付いた。その後、頭から煙を出し、ガクンと気を失った。

「おーい。大丈夫か？神綺？」

「やっぱりこうなったわね。私の予想どおりだわ。」

「予想どおりって……。最初からこうなると思ってたのか……。」

「当たり前じゃない。今まで男性と触れ合ったことがない、男性に対しての免疫が皆無の神綺様を

いきなり抱きしめたりしたら、こうなるのは分かるわよ。まあそれだけじゃないけど。」

「男性に対しての免疫がないって知っておいて何故俺を行かせた？」

「……まあ自分で考えなさい。私は仕事があるからもう行くわ。」

そう言い、メイドは「夢子よ。私は夢子。」……夢子は部屋を出る。

……って、この状況をどうすればいいんだ？

その後、神綺が起きるまで、気まずい空気が流れていた。

神綺が起きてから聞いたんだが、俺が持っている魔法書は神綺が創った物らしい。

その他にも、あのドラゴンやら、魔界人やらの、魔界中の物を創ったらしいが、

創造物の大半が神綺の言うことを聞いていないらしい。神綺はそこが悩んでいるところらしい。

まあ夢子みたいに従っている者もいるが、やはり殆どの魔界人は聞かないようだ。

そしてこの魔界の創造者である神綺が今何をしているかというと、

俺の膝の上に座って、俺の体にしがみついている。何故かというと、少し前に遡る。

・・・

俺を掴んで離さない。仕方ないからその辺の椅子に座り、神綺が離すまで待った。が、中々離さない。

俺はこのままじゃ動きにくいので、神綺の体を揺さぶった。すると、

「んっ、…やぁ……。」

という言葉が。…なんか子供っぽくなってない？と思いつつ頭を撫でると、

「…ふぁ…しんらぁ……。」

…なんか可愛いな。と俺が思っているとき、この部屋に誰かが入って来た。

「神綺様、昼食の用意が出来ましt……。こんなところでなにをしているの？」

「夢子か。いや、神綺が俺から離れなくてな。どうにかできるか？」

「…分かったわ。……神綺様！神綺様？行きますよ神綺様！」

夢子はそう言って、俺から神綺を離そうとする。

「…うぅ。ゆめこちゃん、やぁっ！」

「…くっ、神綺様。……仕方ないですね。神羅。神綺様が普通になるまで面倒見なさい。とりあえず

昼食よ。そのうち神綺様も戻ると思うから。」

「ああ。分かった。」

・・・

……しばらくしたら戻るのか？これ。

「神綺。」

俺は神綺の名を呼びながら頭を撫でる。

「んぅ、なぁに？しんら。」

「いや、別に。」

「ふーん。」

まあこうしてるのも楽しいし、戻るまで気長に待つか。

「神羅。お風呂の準備が出来たわ。…で、神綺様を入れないといけないんだけど、出来る？」

「まあ仕方ないか。出来るだけやってみるよ。……夢子も一緒に入るだろう？」

「なっ！？私も？」

「そりゃあ、俺があまり出来ないかもしれないだろ。だから手伝ってくれ。」

「……まぁ、仕方ないわね。でも変なことはしないでよ。」

「ははは、分かってるよ。」

「そう？ならいいけど。」

ということで風呂に入ることになった。

そして風呂――――。

「神羅。神綺様の体を洗いなさい。私がやるべきなんだけど、神綺様はあなたの方が良さそうだし。」

夢子がそう言うので、俺が神綺の体を洗うことになった。もう夢子の言うとおりにするしかないだろう。

今、神綺は精神が子供に戻っているが、体は女らしいのである。背は普通の女性に比べて低いが。

「しんらー。あらいっこ？」

くっ、俺の中の理性が早くも崩れそうだ。

しかし洗わないことにはここから出れないので、極力変なところに触れないように洗っていく。

「ふふっ、くすぐったいよー。」

くうぅぅっ、可愛すぎる。

「ほら、神羅。手を止めないで洗って。」

後ろから夢子がそう言ってくる。そう言われてもなぁ。
そう思っていると、神綺が夢子の手をとり、
「ゆめこちゃんもあらいっこ？」
そう言って首をかしげる。もう夢子も逃げられないだろう。
「しっ、神綺様……。」
「みんないっしょがたのしいよ？」
「はい……。」
ということで夢子も加わった。
「しんらー。ゆめこちゃんもあらってー。」
「はいはい。分かったよ。」
「神羅。ほ、ほんとにやらないとだめ？」
「仕方ないだろ。まあ洗ってやるから、そこに座れ。夢子は神綺を洗えばいいだろ？」
「…あ、あまり変なところは触らないでね？」
「分かってるよ。ほれ。」
そう言って、夢子の背中に触れる。

「ひゃっ！」

「大丈夫か？嫌ならやめるが。」

「だ、大丈夫よ。いいから続けて。」

そうか、そうならいいんだが。

そう思い俺は夢子の背を優しく洗い始める。

「…ぁ……あっ…ふぁ……ぁん……んぅ……ひゃんっ……」

夢子が何かに耐えるような声を出している。

「ゆめこちゃん。きもちいいのー？」

「ふぇ？…えっ、そ、それは……気持ちいいです／／／／／／」

「ふーん。しんらー、ゆめこちゃんをもっとあらってー。」

「し、神綺様っ。これ以上はち、ちょっと。」

「んー？ゆめこちゃんはあらってもらうのいやなの？」

「い、いえ。嫌ではないんですが、その、恥ずかしいというか…。」

「ならだいじょうぶ！しんらっ、やっちゃって。」

「…夢子、いいのか？」

「し、神羅…。や、優しくして……。」

「……分かった。」

それから夢子の体を隅々まで洗った。もう風呂からは上がったが、夢子は頭から煙を出している。

顔も真っ赤で、声をかけても反応しない。

そんな夢子に神綺が声をかける。

「ゆめこちゃん、ゆめこちゃん。いっしょにねよ？」

「……神綺様っ。私も一緒に寝るんですか？」

「うん！もちろんしんらもいっしょだよ。しんらはまんなかね。」

「えっ、三人で寝るんですか？」

「うん！さんにんのほうがたのしいよ。…ゆめこちゃんはいやなの？」

「いえ、嫌ではありません。ですが……。」

「もうねむいからねっ？」

「……はい。」

どうやら話はまとまったようだ。

「しんらー。ねよっ。」

そして俺たちは同じベッドに三人で寝た。隣の二人を抱き寄せながら。

新規（後書き）

神綺と夢子の口調が分からないんですよね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9490z/

規格外の行く道（仮）

2012年1月9日01時53分発行